

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第62集

# 橋良遺跡(Ⅲ)



2002年3月



巧力自動車総業株式会社

豊橋市教育委員会

は し ら い せ き  
橋 良 遺 跡 (III)

2002年3月



工巧力自動車総業株式会社

豊橋市教育委員会

## 例言

1. 本書は、豊橋市柱三番町115・116・117の一部において、店舗建設のための土地造成に伴い事前に実施された、橋良遺跡の第4次発掘調査報告書である。調査期間は平成13年4月4日～5月31日、調査面積は1,090㎡、調査担当は岩原剛（豊橋市教育委員会）である。
2. 発掘調査は、ユタカ自動車総業株式会社から委託をうけた豊橋市教育委員会が行った。なお、発掘調査・報告書作成にかかる経費はすべてユタカ自動車総業株式会社が負担した。
3. 発掘作業及び整理作業に際して、土地所有者であるユタカ自動車総業株式会社からは多大なご理解とご協力を得たほか、地元の方々からのご理解とご協力を得た。ここに記して感謝の意を表する次第である。
4. 本書の執筆に際して、伊藤厚史（名古屋市見晴台考古資料館）、石川明弘、小畑頼孝、鈴木敏則（浜松市博物館）・鈴木とよ江（西尾市教育委員会）・鈴木正貴（[[財]愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター）・藤澤良祐（瀬戸市文化財センター）・家田健吾（豊橋市自然史博物館）の各氏にご教示を頂いた。
5. 本書の執筆・編集は岩原剛（教育部美術博物館文化財係）が行った。
6. 調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅲ系に準拠し、これを示した。本書に使用した方位はこの座標に沿うものである。遺構・遺物のスケールについてはそれぞれに明示した。写真の縮尺は任意である。
7. 本調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。
8. 橋良遺跡の過去の調査については、次の文献を参照されたい。  
豊橋市教育委員会 1994 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第18集 橋良遺跡』  
豊橋市教育委員会他 1999 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第51集 橋良遺跡（Ⅱ）』

# 目次

## 第1章 調査の経緯と経過

1. 調査の経緯 .....1
2. 調査の経過 .....2

## 第2章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地 .....3
2. 歴史的環境 .....4

## 第3章 遺構と遺物

1. 遺構の概要 .....9
2. 方形周溝墓 .....12
3. 土器棺墓 .....24
4. 溝 .....26
5. 柵 .....44
6. 土塊 .....45
7. 表土出土遺物 .....51

## 第4章 まとめ

1. 調査区における遺構の変遷 .....52
2. まとめ .....54

付載 橋良遺跡採集資料の紹介 .....56

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図	調査区位置図 (1/10,000) .....	1
第2図	橋良遺跡調査地位置図 (1/2,500) .....	2
第3図	橋良遺跡周辺地形分類図 (1/30,000) .....	3
第4図	橋良遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000) .....	5
第5図	調査区全体図 (1/100) .....	7
第6図	遺構配置模式図 (1/250) .....	9
第7図	各遺構の土層 (1/100) .....	10
第8図	SZ-1~4 (1/80) .....	12
第9図	A-1区SD-1出土状況 (1/20) .....	13
第10図	A-1区SD-2出土状況 (1/20) .....	13
第11図	A-1区SD-3・A-2区SK-1出土状況 (1/20) .....	14
第12図	SZ-5~7 (1/80) .....	15
第13図	B-1区SK-43出土状況 (1/20) .....	16
第14図	B-2区SK-14出土状況 (1/20) .....	16
第15図	SZ-8 (1/80) .....	17
第16図	A-2区SK-1出土状況 (1/20) .....	17
第17図	SZ-9 (1/80) .....	18
第18図	B-2区SK-5出土状況 (1/20) .....	18
第19図	SZ-10 (1/80) .....	18
第20図	A-3区SK-6出土状況 (1/20) .....	19
第21図	A-4区SK-13出土状況 (1/20) .....	19
第22図	方形周溝墓出土土器-1 (1/3) .....	21
第23図	方形周溝墓出土土器-2 (1/3) .....	22
第24図	土器墓出土状況 (1/20) .....	24
第25図	土器墓出土遺物実測図 (1/3) .....	25
第26図	A-2区SD-1出土遺物実測図-1 (1/3) .....	27
第27図	A-2区SD-1出土遺物実測図-2 (1/3) .....	28
第28図	A-2区SD-1出土遺物実測図-3 (1/3) .....	29
第29図	A-2区SD-2・3出土遺物実測図 (1/3) .....	33
第30図	A-2区SD-4出土遺物実測図 (1/3) .....	34
第31図	A-2区SD-5出土状況-1 (1/20) .....	36
第32図	A-2区SD-5出土状況-2 (1/20) .....	37
第33図	A-2区SD-5出土状況-3 (1/20) .....	38
第34図	A-2区SD-5出土遺物実測図-1 (1/3) .....	39

第35図	A-2区SD-5出土遺物実測図-2 (1/3)	40
第36図	A-2区SD-6出土遺物実測図 (1/3・1/4)	42
第37図	B-4区SD-1 (1/80)	43
第38図	B-4区SD-1出土状況 (1/20)	43
第39図	B-4区SD-1出土遺物実測図 (1/3)	43
第40図	SA-1 (1/80)	44
第41図	SA-2 (1/80)	44
第42図	SA-3 (1/80)	45
第43図	A-1区SK-1 (1/80)	45
第44図	A-1区SK-7 (1/80)	46
第45図	A-1区SK-7出土遺物実測図 (1/3)	46
第46図	A-1区SK-5 (1/80)	46
第47図	A-3区SK-1~4 (1/80)	47
第48図	A-4区SK-1 (1/80)	47
第49図	A-4区SK-1出土遺物実測図 (1/3)	47
第50図	B-2区SK-12・15 (1/80)	48
第51図	B-2区SK-12出土遺物実測図 (1/3)	48
第52図	B-2区SK-15出土遺物実測図 (1/3)	48
第53図	B-2区SK-17出土状況 (1/20)	49
第54図	B-2区SK-17出土遺物実測図 (1/3)	49
第55図	B-3区SK-10 (1/80)	50
第56図	B-3区SK-10出土遺物実測図 (1/3)	50
第57図	B-3区SK-10出土状況 (1/20)	50
第58図	B-4区SK-8 (1/80)	50
第59図	表土出土遺物実測図 (1/3)	51
第60図	調査区遺構変遷図 (1/800)	53
第61図	三河地方における弥生中期の方形周溝墓 (1/800)	54
第62図	橋良遺跡の構造 (暫定案)	55
第63図	橋良遺跡採集資料-1 (1/3)	57
第64図	橋良遺跡採集資料-2 (1/3)	58

## 表 目 次

第1表	方形周溝墓出土遺物観察表	23
第2表	土器棺墓出土遺物観察表	24
第3表	A-2区SD-1出土遺物観察表	30
第4表	A-2区SD-2・3出土遺物観察表	33
第5表	A-2区SD-4出土遺物観察表	34
第6表	A-2区SD-5出土遺物観察表	40
第7表	A-2区SD-6出土遺物観察表	41
第8表	B-4区SD-1出土遺物観察表	43
第9表	A-1区SK-7出土遺物観察表	46
第10表	A-4区SK-1出土遺物観察表	47
第11表	B-2区SK-12・15出土遺物観察表	48
第12表	B-2区SK-17出土遺物観察表	49
第13表	B-3区SK-10出土遺物観察表	49
第14表	表土出土遺物観察表	51
第15表	橋良遺跡採集遺物観察表	59

## カラー図版目次

1	調査区全景 (上から)	
2-1	調査区全景 (北東から)	2 方形周溝墓群 (南西から)
3-1	A-1区SD-1 (SZ-1) 出土状況 (東から)	
	2 土器棺墓出土状況 (南から)	
4-1	A-2区SD-5・6 (南西から)	2 A-2区SD-5区出土状況-1 (南西から)
5-1	S-2区SD-5出土状況-2 (東から)	
	2 A-2区SD-6漆器椀出土状況 (南から)	
6-1	A-2区SD-5出土遺物	2 方形周溝墓出土遺物
	3 土器棺	

## 写真図版目次

- 図版 1 調査区全景 (上から)
- |                          |                       |
|--------------------------|-----------------------|
| 2-1 調査区全景-2 (東から)        | 2 調査区全景-3 (北東から)      |
| 3-1 方形周溝墓群 (南西から)        | 2 土器棺墓出土状況 (西から)      |
| 4-1 A-1区SD-1出土状況 (南東から)  |                       |
| 2 A-2区SK-1出土状況-1 (北から)   |                       |
| 3 B-1区SK-43出土状況 (東から)    |                       |
| 4 A-2区SK-1出土状況-2 (南から)   |                       |
| 5 B-2区SK-5出土状況 (南から)     | 6 A-4区SK-13出土状況 (東から) |
| 5 方形周溝墓出土土器・土器棺          |                       |
| 6-1 A-2区SD-1~5土層 (北から)   | 2 A-2区SD-1土層 (南から)    |
| 3 A-2区SD-5土層 (南西から)      | 4 A-2区SD-6土層 (南から)    |
| 5 A-2区SD-5・6土層 (北から)     |                       |
| 7-1 A-2区SD-1~4 (南から)     | 2 A-2区SD-5・6 (南西から)   |
| 8-1 A-2区SD-5 (南西から)      |                       |
| 2 A-2区SD-5土橋状遺構 (南西から)   |                       |
| 9-1 土橋状遺構断面 (東から)        |                       |
| 2 A-2区SD-5出土状況-1 (南から)   |                       |
| 3 A-2区SD-5出土状況-2 (西から)   |                       |
| 4 A-2区SD-5出土状況-3 (東から)   |                       |
| 5 A-2区SD-6漆器碗出土状況 (南西から) |                       |
| 6 B-4区SD-1出土状況 (北から)     |                       |
| 10 A-2区SD-1出土遺物          |                       |
| 11 A-2区SD-2~4出土遺物        |                       |
| 12 A-2区SD-5出土遺物          |                       |
| 13 A-2区SD-6・B-4区SD-1出土遺物 |                       |
| 14-1 A-3区SK-1~4 (南から)    | 2 A-4区SK-1 (東から)      |
| 3 B-2区SK-12・15 (西から)     | 4 B-2区SK-17 (東から)     |
| 5 B-3区SK-10 (南西から)       | 6 作業風景                |
| 15 橋良遺跡採集資料              |                       |



## 第1章 調査の経緯と経過

### 1. 調査の経緯 (第1図・2図)

橋良遺跡は、豊橋市の柱三番町を中心とする台地上に立地する、弥生時代中期後葉および中世を主体とする遺跡である。過去に3度に渡る発掘調査が実施されている。

平成11年、柱三番町交差点の北東側に所在する今回の調査地について、土地所有者であるユタカ自動車総業株式会社から、店舗建設のため土地造成を行いたい旨の相談を豊橋市教育委員会が受けるとともに、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて豊橋市教育委員会教育長あて照会がなされた。豊橋市教育委員会では現地で試掘調査を実施した結果、現有建物の建設に際して破壊されてしまった部分も存在するが、今回の調査対象地となった付近では試掘調査トレンチから遺構が確認され、若干の遺物が出土した。そこで市教育委員会は、遺構が一部遺存すること、土地造成工事を実施する場合はその取り扱いが問題となることなどを土地所有者に伝えた。

その後しばらくの期間をおいて、平成12年11月6日付で埋蔵文化財発掘の届出が土地所有者から愛知県教育委員会教育長あて提出された。工事計画では、店舗建設に際して周囲からの乗り入れを考慮し、造成対象地を全体的に道路敷の高さまで削り取ることとなっており、試掘調査の結果把握された地下の遺構面は、ほとんど掘削の対象内となっていることが明らかになった。このため、削平される部分について発掘調査を行い、記録保存に務めることで、土地所有者と豊橋市教育委員会との間で合意に達した。

平成13年4月2日付をもって、発掘調査の実施に関する委託契約をユタカ自動車総業株式会社と豊橋市教育委員会との間で結び、引き続き発掘作業にとりかかった。



第1図 調査区位置図 (1/10,000)

## 2. 調査の経過

発掘調査（本調査）は平成14年4月4日～5月31日に行った。調査面積は1,090㎡である。

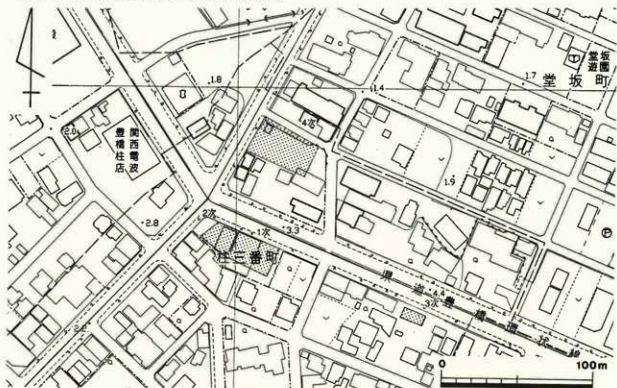
まず重機を用いて表土剥ぎを行った。続けて調査区の形状に合わせ、基準点の設定を行った。調査を行う上での便宜を図るため、あくまで任意で調査区の中央に基準のラインを設定し、そこから10mメッシュで基準点を設定した。また設定したメッシュは、アルファベットと数字の複合で表現した。すなわち、調査区の南から北へA・B・C、西から東へ1～4と命名し、A-1区、B-2区といった具合である。設定した基準点は国土座標上の位置を、業者に委託して求めた。なお、この時点で調査区の東側が大きく攪乱を受けていることが判明したため、調査対象範囲を縮小した。

基準点の設定に続いて、遺構検出作業を行った。人力で表土除去後の遺構面を精査するもので、西から東へと作業を進めていった。また排土搬出の都合から、ある程度遺構検出が進んだところで、遺構の掘削を実施している。遺構掘削もすべて人力で行った。

遺構検出面は、表土直下の地山面である。今回の調査区の場合、地山面は東側が褐色系の砂質土であったが、西側から中央にかけては褐色系の砂礫層であった。砂礫層部分では遺構周辺のにじみが著しく、これが遺構検出・掘削の大きな障害になった。

4月は調査区西半の調査を、5月は東半の調査を実施した。遺構の掘削を終えた部分から、順次遺構平面図や遺物出土状況図、土層図等の作成や、個別遺構の写真撮影などを行った。5月の末には遺構の掘削作業が完了し、航空写真撮影を行っている。

なお発掘調査の成果については、調査中に「橋良遺跡通信」と名付けた連絡紙を調査区付近に回覧することで、情報を積極的に公開した。5月26日には調査成果を公表する現地説明会を開催し、付近住民を中心とする市民約500名の参加を得た。



第2図 橋良遺跡 調査地位置図 (1/2,500)

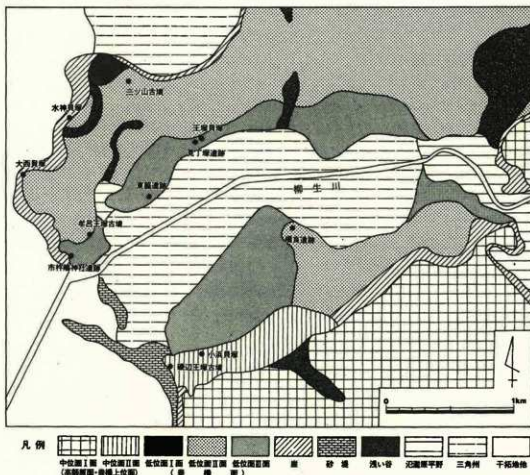
## 第2章 遺跡の立地と歴史的環境

### 1. 遺跡の立地 (第3図)

豊橋市は、東三河を貫流する豊川の downstream にあり、地形は市域の北から東側にかけての弓張山地、南側の豊川と天竜川によって形成された河岸段丘、そして沖積平野に大別される。

河岸段丘は、高位・中位・低位の3面に分けられる。橋良遺跡は、このうちの「豊橋面」と呼ばれる、標高3～4 m 前後の低位面に所在している。微地形的には南から北へ向かって張り出した段丘の端部一帯にあたり、ほぼ平坦な場所である。西・北・東側は柳生川によって形成された沖積平野に囲まれており、今回の調査区の北・東側には間近に段丘崖が迫っている。このため、調査区一帯は当時の集落の北端付近に相当すると思われる。

橋良遺跡の中心的な時期である弥生時代中期後葉は、気温の寒冷化に伴う小海退期であった。柳生川は河口付近に海岸砂丘が発達しているため河川水の排水が悪く、極めて閉鎖性が高い。このため、橋良遺跡の位置は当時の河口まで約1.5kmほどにも関わらず、海水遡上の無い水田立地に好都合な沖積平野に隣接していたと推定されている〔豊橋市教育委員会1994〕。



第3図 橋良遺跡周辺地形分類図 (1/30,000)

## 2. 歴史的環境 (第4図)

橋良遺跡とその周辺は、市内でも有数の遺跡集中地帯である。また市域の西部に位置し、三河湾を臨む地域でもあることから、海に関わる遺跡が多く確認されているところでもある。

### 縄文時代

橋良遺跡ではこれまでのところ縄文時代の遺構・遺物は確認されていないが、今回の調査を含め、条痕土器がわずかに出土しており、当遺跡の成立が弥生時代中期前葉以前まで遡る可能性を持つ。また橋良遺跡は当時の海岸線から約1.5kmほどしか離れていないためか、周辺には縄文時代の貝塚がいくつか確認されている。

小浜貝塚(18)は4ヶ所の地点貝塚からなり、前期から晩期までの遺物が確認されている。出土遺物には人骨、土器、石器、貝製品などがある。

この付近の貝塚の主体を成すのは、晩期を中心に形成された貝塚群で、坂津寺貝塚(3)、水神貝塚(第1・2貝塚:4)、大西貝塚(8)などが牟呂地区の海岸線に営まれている。水神貝塚からは石組炉、集石、地床などが検出され、遺物には晩期の土器をはじめ石器や骨角器、貝製品などが出土している。ことに南海産イモガイ製の貝輪は、縦型タイプとしては国内の分布の東限にあたる。大西貝塚は長さ約185m、幅約40mの規模を持つ、西日本最大級の貝塚である。ここからは集石、地床炉、土壇などが検出されており、遺物には晩期の土器をはじめ石器、骨角器、獣骨などが出土している。これら牟呂地区の貝塚群は石器・骨角器などの出土が極端に少ないため、干し貝加工を主目的とした「ハマ貝塚」であったと推定されている。

### 弥生時代

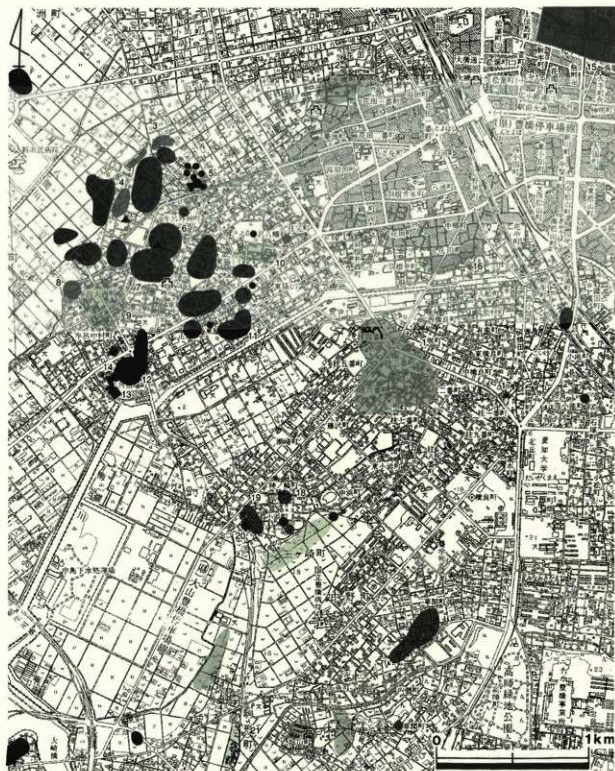
橋良遺跡は柳生川流域における中心的な集落であると同時に、中期後葉の東三河を代表する集落と見ても過言ではないだろう。過去の調査では竪穴住居や方形周溝墓が検出されており、ことに方形周溝墓からは弥生時代中期後葉、古井式～長床式の土器が多数出土している。この周辺では水神貝塚、東脇遺跡(11)などで弥生土器が出土しているほか、見丁塚遺跡(10)では周溝の四隅が切れたタイプの方形周溝墓が検出されている。

近年の詳細分布調査により、豊橋市の海浜部から梅田川流域の段丘縁辺部にかけて、多数の弥生集落が確認されている。駒郷遺跡(21)は海岸砂丘上に立地する遺跡で、土器棺と推定される長床式の大形土器が採集されている。

### 古墳時代

古墳時代の遺跡として、橋良遺跡の3次調査で検出された竪穴住居の貯蔵穴から、S字状口縁台付甕、山陰系の甕、畿内系的大型高坏が供伴して出土しており、中期に属するものである。しかし橋良遺跡周辺ではこれ以外に中期の遺跡は確認されていない。

集落では大西遺跡(9)が7世紀代の拠点的な例と位置づけられよう。主に掘立柱建物によって構成されており、土器の廃棄遺構や須恵器を使用した祭祀遺構などが検出されている。



- |          |            |           |       |
|----------|------------|-----------|-------|
| 1 横良遺跡   | 8 大西貝塚     | 15 吉田城址   | ● 古墳  |
| 2 百北遺跡   | 9 大西遺跡     | 16 羽根井遺跡  | ▲ 古家址 |
| 3 坂津寺貝塚  | 10 貝丁塚遺跡   | 17 横良東郷古家 | ◻ 内城址 |
| 4 水神貝塚   | 11 東郷遺跡    | 18 小浜貝塚   |       |
| 5 三ツ山古墳群 | 12 市場遺跡    | 19 王郷遺跡   |       |
| 6 市道遺跡   | 13 市村船神社古墳 | 20 磯辺王塚古墳 |       |
| 7 公文遺跡   | 14 半呂王塚古墳  | 21 駒郷遺跡   |       |

第4図 横良遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

古墳は首長墳や後期の小型墳などが確認されている。その数は決して多くないが、首長墳には特筆される性格のものが見られる。

市杵嶋神社古墳(13)は、全長60m前後と推定される前方後方墳である。後方部には葺石が見られ、くびれ部からは底部穿孔された壺、甕などが出土している。前期の有力首長墳と位置づけられる。

三ツ山古墳(5)は全長37mを測る前方後円墳で、全周する周溝を持ち、墳丘上には円筒埴輪や形象埴輪が立てられていた。発掘調査により後円部と前方部にそれぞれ1基ずつ石室が確認され、前方部の石室からは鉄鎌、大刀、馬具の轡、須恵器などが出土している。6世紀前葉の首長墳である。

磯辺王塚古墳(20)は南西に開口する横穴式石室を持ち、双龍環頭・頭椎・円頭の各種飾大刀を始め、金銅装馬具、銀製空玉、トンボ玉、耳環など豊富な遺物が出土している。また牟呂王塚古墳(14)は全長27.5mの前方後円墳で、主体部からは圭頭大刀、金銅装の古葉、馬鈴などが出土している。これらは6世紀後葉～末葉の首長墳と位置づけられる。渥美湾沿岸部において、三ツ山古墳以降に連続して築かれた首長墳には金銅装製品を初めとする優れた副葬品類が目立ち、ヤマト政権との色濃いつながりが伺える。

## 古代

古代の遺跡では、牟呂地区の市道遺跡(6)が代表的な事例である。寺院と官衙的な施設(豪族の居館と推定)という2つの性格を持った遺跡であり、瓦や金属製仏器模倣須恵器、瓦塔、「寺」と墨書された灰釉陶器など、多数の遺物が出土している。市道遺跡では、瓦を焼成したロストル式の平窯も検出されている。

ところで、橋良遺跡周辺の沖積低地にはかつて条里遺構が認められた。条里界線の方位はN-22°-1Wを示しており、改修前の柳生川の流路に平行している。ただしこの設置時期は不明である。

## 中世

橋良遺跡では中世陶器を始めとする遺物が多数出土している。また、豪族居館に伴う堀が検出された公文遺跡(7)、多彩な遺物が出土し長期に渡って集落が営まれた王郷遺跡(19)など、橋良遺跡周辺では多数の遺跡が確認されている。このほか橋良遺跡の東側段丘斜面には橋良東郷古窯(17)が築かれ、陶器や瓦が焼成されている。

なお橋良遺跡周辺は、伊勢神宮領・橋良御厨の比定地である。橋良御厨は内宮に属し、「嘉承三年(1108)注文」、「永久三年(1115)宣旨」にすでに現れていることから、12世紀初頭には設定されていたものである。橋良遺跡でも同時期の遺物が出土したほか、近年の詳細分布調査によって600m四方に渡り中世の遺物が採集されており、橋良御厨の比定地とするのは妥当と思われる。

## 参考文献

- 歌川 学 1984 「三河国の条里制」『三河遠江の史的研究』  
 豊橋市教育委員会 1994 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第18集 橋良遺跡』  
 豊橋市史編集委員会 1973 『豊橋市史』第1巻

1

2

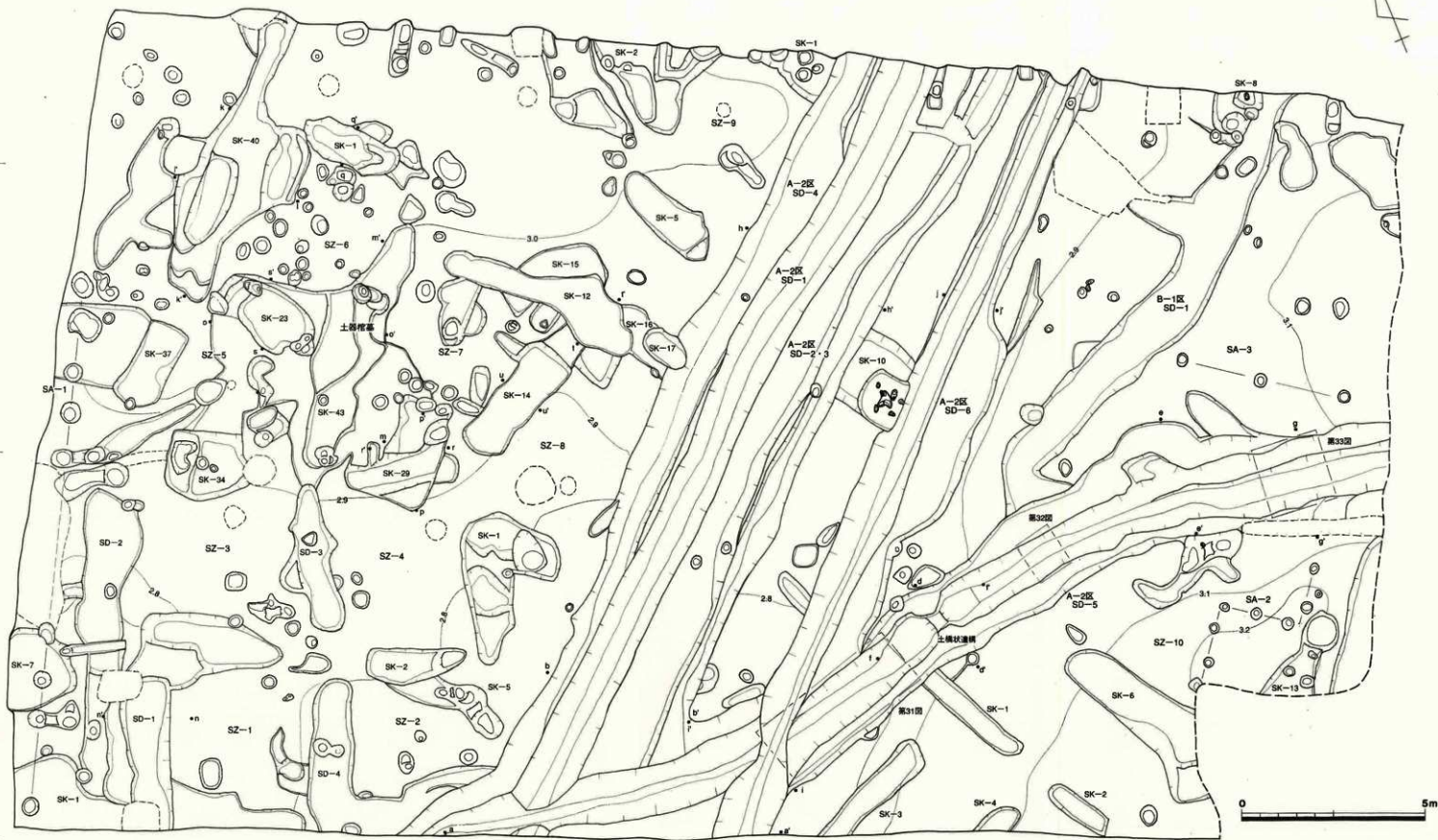
3

4

C

B

A



第5図 調査区全体図 (1/100)

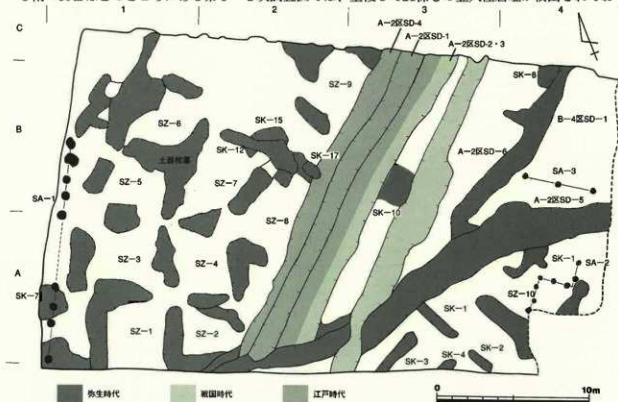
## 第3章 遺構と遺物

### 1. 遺構の概要 (第6図)

調査区は、南から北へ張り出した段丘の端部付近に相当する。地山面での標高は2.8~3.1mで、全体に東から西にかけてわずかな下がり傾斜となっているが、現地ではそれほど傾斜は意識されない。今回の発掘調査では、弥生時代中期後葉(古井式・長床式)を中心に、弥生時代後期後葉、平安時代末葉、戦国時代、江戸時代の遺構が確認されている。

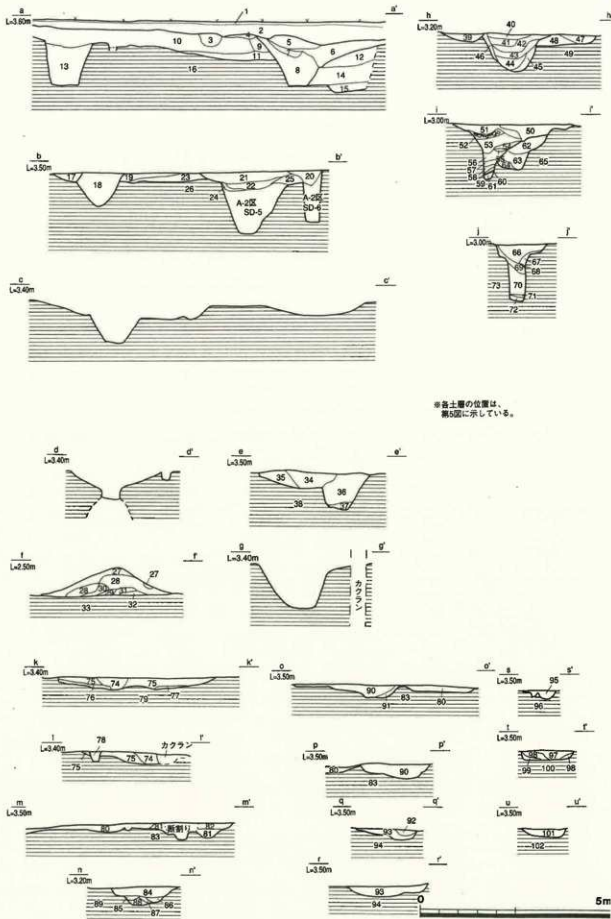
弥生時代中期後葉の遺構には、方形周溝墓(SZ)、土器棺墓、環濠(A-2区SD-5)、溝(B-4区SD-1)、土塼(SK)がある。方形周溝墓は調査区の西半を中心に10基確認されており、それぞれが周溝を共有しつつ密集している。地山の性格上遺構検出が難しく、はっきりと周溝の形態を把握できなかったものもあるが、多くは四隅が途切れるタイプのもと思われる。また土塼の中には周溝と考えられるものがほかにもあり、恐らく当調査区の広い範囲で方形周溝墓が展開していた可能性が高い。土器棺墓は方形周溝墓の周溝と重複するようにして1基確認されている。環濠は調査区の南東側に、ほぼ東西に延びるかたちで検出されている。段丘崖との位置関係、さらに過去の調査の状況から勘案して、環濠の内側はその南側一帯であると推定される。溝は1条のみ検出されている。環濠に接続し、そこから先は検出されていない。土塼は不整形なものばかりで、性格を特定できるものはほとんど無い。

なお、竪穴住居・掘立柱建物をはじめとする住居址は今回まったく確認されなかった。当調査区から南へ50mほどのところにある第1・2次調査区では、重複して21棟もの竪穴住居址が検出されてお



第6図 遺構配置模式図 (1/250)





第7図 各遺構の土層 (1/100)

り、遺構のあり方は極めて対照的である。

平安時代末葉の遺構自体は確認されていないが、弥生時代中期の環濠(A-2区SD-5)の上層から遺物がまとも出土している。恐らく当時まだ環濠は埋没しきっておらず、溝状の窪みとなっていたため、ここに遺物が廃棄されたものと思われる。あるいは屋敷地を取り囲む区画溝として再利用された可能性もあろう。

戦国時代の遺構には溝(A-2区SD-6)がある。著しく深く掘削された溝であり、その用途は当調査区の結果だけでは判断しがたい。底付近の粘質土中から漆器碗1点が出土している。

江戸時代の遺構には溝4条(A-2区SD-1・2・4)がある。これらはほぼ同じ位置に何度も掘り返された溝で、屋敷地の区画溝と考えるのが妥当だろう。

その他、塀や掘立柱建物の柱穴と考えられる土壌がある。遺物を伴わないため詳細な帰属時期は不明だが、恐らく中世から近世に属するものだろう。

なお、当調査区における基本層序は、遺跡が段丘上に立地していることもあって堆積土は見られない。元駐車場だったところに敷かれた砕石層、さらに表土層があり、その下は褐色系の砂礫層、及び褐色系の砂質土層からなる地山である。遺物包含層も認められないことから、遺構の検出は地山面で行っている。なお地山は調査区の東端付近のみ砂質土層だが、大半は砂礫層であった。砂礫中には遺構埋土と同色のじみが見られ、多くの遺構を不注意から掘り過ぎてしまった。

以下の記述をするにあたり、遺構の名称は調査当時のものを使用している。例えば最終的に土壌(SK)と判断されたものであっても、命名時に溝(SD)と認識したものについては、改名せずそのまま示した。また、文中で示した遺構規模の数値は、検出面からの値である。

## 第7図 層名

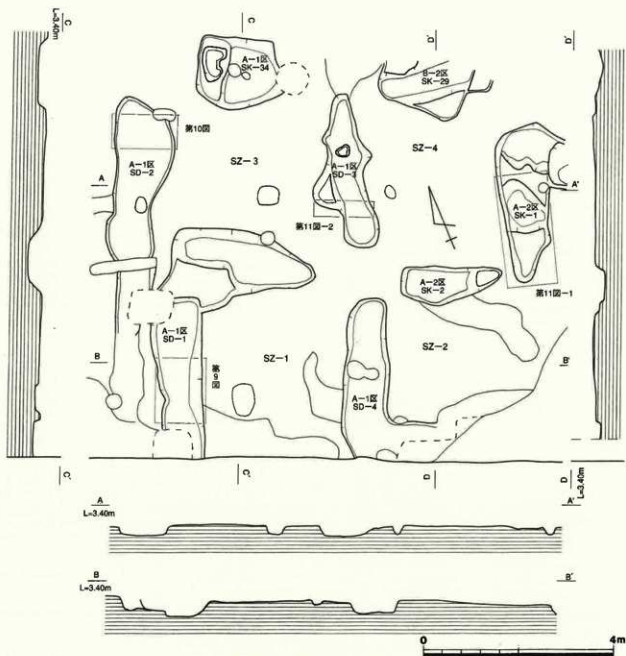
1. 砕石	27. 明茶褐色砂質土層	53. 茶褐色砂礫層	} SD 6	(地山)
2. 茶褐色砂質土層	28. 暗茶褐色砂質土層	54. 黒色粘質土層		80. 暗茶褐色砂質土層
3. 暗茶褐色砂質土層	29. 明茶褐色砂質土層	55. 淡茶褐色砂質土層		81. 暗茶褐色砂質土層
4. 淡褐色砂礫層	30. 灰褐色砂質土層	56. 暗茶褐色砂質土層		82. 暗茶褐色砂質土層
5. 淡茶褐色砂礫層	31. 灰褐色砂質土層	57. 暗灰褐色粘質土層		83. 茶褐色砂礫層
6. 淡茶褐色砂質土層	32. 灰褐色砂質土層	58. 暗灰色粘質土層		(地山)
7. 淡茶褐色砂礫層	33. 茶褐色砂礫層	59. 灰色粘質土層		84. 暗茶褐色砂質土層
8. 暗茶褐色砂礫層	(地山)	60. 茶褐色砂質土層		85. 暗茶褐色砂質土層
9. 淡茶褐色砂質土層	34. 茶褐色砂質土層	61. 暗灰色粘質土層		86. 暗茶褐色砂質土層
10. 暗茶褐色砂質土層	35. 暗茶褐色砂質土層	62. 茶褐色砂質土層		87. 茶褐色砂質土層
11. 暗茶褐色砂質土層	36. 茶褐色砂質土層	63. 暗灰色砂質土層	88. 明茶褐色砂質土層	
12. 黒褐色砂質土層	37. 暗茶褐色砂質土層	64. 暗灰色粘質土層	89. 茶褐色砂礫層	
13. 暗褐色砂質土層	38. 茶褐色砂礫層	65. 茶褐色砂礫層	(地山)	
14. 淡茶褐色砂質土層 ・同砂礫層	39. 暗灰褐色砂質土層	66. 暗茶褐色砂質土層	90. 暗茶褐色砂質土層	
15. 暗茶褐色砂質土層	40. 暗灰褐色砂礫層	67. 暗茶褐色砂質土層	91. 暗茶褐色砂質土層	
16. 暗灰色粘質土層 (地山)	41. 暗茶褐色砂礫層	68. 茶褐色砂質土層	92. 暗茶褐色砂質土層	
17. 淡茶褐色砂質土層	42. 暗茶褐色砂礫層	69. 茶褐色砂質土層	93. 暗茶褐色砂質土層	
18. 暗茶褐色砂礫層	43. 暗茶褐色砂質土層	70. 褐色砂礫層	94. 茶褐色砂礫層	
19. 暗灰褐色砂質土層	44. 暗灰褐色砂礫層	71. 暗灰色粘質土層	(地山)	
20. 暗茶褐色砂質土層	45. 暗茶褐色砂質土層	72. 褐色砂礫層	95. 暗茶褐色砂質土層	
21. 暗茶褐色砂質土層	46. 茶褐色砂質土層	73. 茶褐色砂礫層	96. 茶褐色砂礫層	
22. 黒褐色砂質土層	47. 暗灰褐色砂質土層	(地山)	(地山)	
23. 淡茶褐色砂質土層	48. 茶褐色砂質土層	74. 黒褐色砂質土層	97. 黒褐色砂質土層	
24. 暗灰褐色砂質土層	49. 茶褐色砂礫層	75. 暗茶褐色砂質土層	98. 暗茶褐色砂質土層	
25. 暗茶褐色砂質土層	(地山)	76. 茶褐色砂礫層	99. 茶褐色砂礫層	
26. 淡茶褐色砂礫層 (地山)	50. 暗灰褐色砂質土層	77. 淡灰褐色砂質土層	100. 暗茶褐色砂質土層	
	51. 茶褐色砂質土層	78. 暗茶褐色砂質土層	101. 茶褐色砂礫層	
	52. 茶褐色砂質土層	79. 暗褐色砂礫層	102. 茶褐色砂礫層	

## 2. 方形周溝墓 (第8~23図)

方形周溝墓は調査区の西半を中心として、10基が分布している。前述のようにいずれも弥生時代中期後葉に属すると考えられ、大半は周溝を共有し合うタイプの「連接型」方形周溝墓群である。規模は全般に小さく、周溝の埋土からは各墓の造営時期の前後関係を把握できなかった。また環境よりも早い時期に営まれており、明らかに方形周溝墓とは特定できなかった一部の土壌をその周溝と認めて良いならば、本来は調査区のほぼ全域に方形周溝墓が分布していたと思われる。

## SZ-1 (第8・9図)

A-1区で検出されたが、南側は調査区外となっている。周溝であるA-1区SD-1およびA-

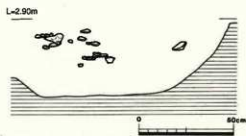
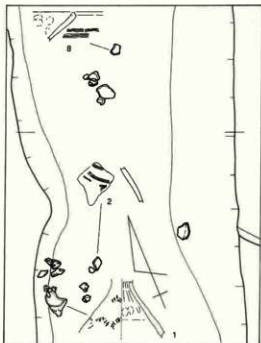


第8図 SZ-1~4 (1/80)

1区SD-4によって区画され、平面形は方形を呈する。盛土はすでに削平されて主体部は残っていない。規模は周溝の内側で東西3.1m、南北3.6m以上、外側で東西5mを測る。周溝の規模は、A-1区SD-1が幅0.9~1.4m、深さ0.45m、A-1区SD-4が幅0.9m、深さ0.35mをそれぞれ測る。前者はSZ-3の南側、後者はSZ-2の西側周溝として共有される。なお、前者と後者の間は陸橋状に掘り残されているが、前者にあっても、直角に屈曲する部分は底が浅くっており、掘り残しを意識したものと判断される。

周溝の埋土は基本的に暗茶褐色砂質土であるが、流入の方向は判然としなかった。また隣接するほかの墓との前後関係も、掘り直しなどの痕跡から明らかにすることはできなかった。

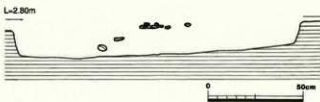
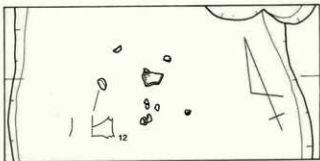
遺物はA-1区SD-1からわずかにまとまって出土している(第9図)。いずれも底から20~40cmほど浮いた状態で出土しており、墓上から破損して転落したと供献土器の一部と思われる。出土遺物には細頸壺、壺類、磨製石斧片など(第22図1~9)がある。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期後葉、古井式期と考える。



第9図 A-1区SD-1出土状況(1/20)

#### SZ-2 (第8図)

A-1・2区で検出されたが、南側は調査区外となっている。周溝であるA-1区SD-4およびA-2区SK-2によって区画され、東側では周溝は未確認だが、平面形はほぼ方形を呈すると思われる。盛土はすでに削平されて主体部は残っていない。規模は周溝の内側で3.35m以上を測る。周溝の規模は、A-2区SK-2が長さ2.05m、幅0.45m、深さ0.25mを測り、SZ-4と共有される。A-1区SD-4との間は陸橋状に掘り残されているが、周溝の埋土は暗茶褐色砂質土で、流入の方向は判然としない。



第10図 A-1区SD-2出土状況(1/20)

出土遺物には太頸壺など(第22図10~12)があり、時期は弥生時代中期後葉、古井式期と考える。

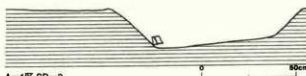
## SZ-3 (第8・10・11図)

A-1区で検出された。周溝であるA-1区SD-1~3、A-1区SK-34によって区画され、平面形はほぼ長方形を呈する。盛土は削平されて主体部は残っていない。規模は周溝の内側で東西3.8m、南北2.8m、外側で東西5.3m、南北5.4mを測る。周溝の規模は、A-1区SD-2が幅0.8m、深さ0.2m、A-1区SD-3が幅0.8m、深さ0.25m、A-1区SK-34が幅1.5m、深さ0.25mをそれぞれ測る。A-1区SD-3はSZ-4の西側周溝、A-1区SK-34はSZ-5の南側周溝として共有される。なお、各周溝間の四隅は掘り残されている。周溝の埋土は基本的に暗茶褐色砂質土であるが、流入の方向は判然としない。

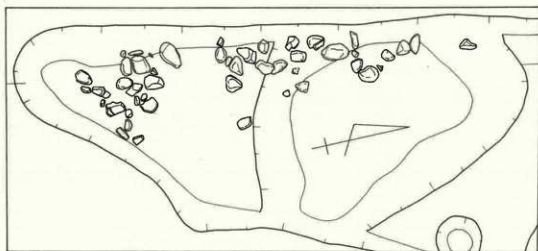
遺物はA-1区SD-2とSD-3からわずかに出土している(第11図)。後者からは甕(第22図13)があり、遺構の時期は弥生時代中期後葉、古井式期と考える。



L=2.90m



A-1区SD-3



L=3.10m



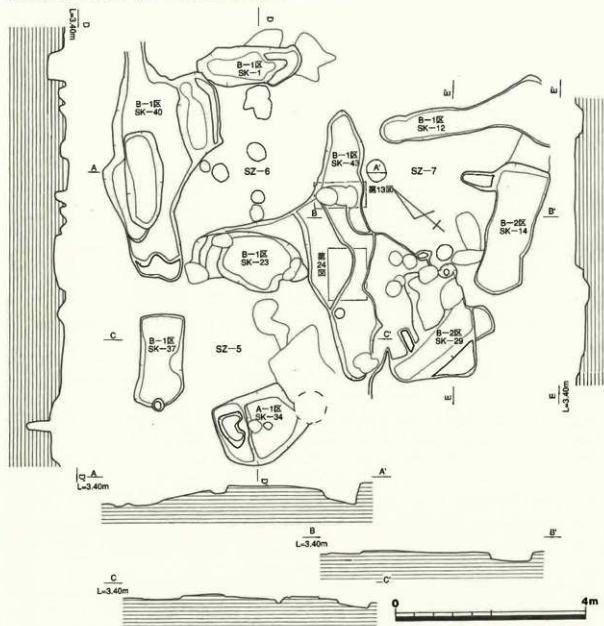
A-2区SK-1

第11図 A-1区SD-3・A-2区SK-1出土状況(1/20)

## SZ-4 (第8・11図)

A-1・2区で検出された。周溝であるA-1区SD-3、A-2区SK-1・2、およびB-2区SK-29によって区画され、平面形は不整形な方形を呈する。盛土は削平されて主体部は残っていない。規模は周溝の内側で東西2.8m、南北3.6m、外側で東西4.6m、南北5.0mを測る。周溝の規模は、A-2区SK-1が幅1.0m、深さ0.15m、B-2区SK-29が幅0.85m、深さ0.3mをそれぞれ測る。A-2区SK-1は東に屈曲してSZ-8の南側、B-2区SK-29はSZ-7の南側周溝として共有される。なお、各周溝間の四隅は陸橋状に掘り残されている。周溝の埋土は基本的に暗茶褐色砂質土であるが、流入の方向は判然としない。

遺物はほとんど出土していないが、A-2区SK-1からは円礫がまとめて出土している(第11図)。遺構の時期は、ほかの方形周溝墓と同様弥生時代中期後葉と考える。



第12図 SZ-5~7 (1/80)

## SZ-5 (第12図)

B-1区で検出された。周溝であるA-1区SK-34、B-1区SK-23・37・43によって区画され、平面形は長方形を呈するが、地山のにじみにより周溝を掘りすぎたため不整形である。盛土はすでに削平されて主体部は残っていない。規模は周溝の内側で東西3.2m、南北2.6m、外側で東西4.8m、南北4.9mを測る。周溝の規模は、B-1区SK-37が長さ2.0m、幅0.9m、深さ0.1m、B-1区SK-23が長さ2.4m、幅1.0m、深さ0.25mをそれぞれ測る。またB-1区SK-43は2つの周溝が接続したものと思われ、SZ-5に伴うのはその南半部分だけであろう。B-1区SK-23はSZ-6の南側、B-1区SK-43はSZ-7の西側周溝として共有される。

なお、各周溝間の四隅は陸橋状に掘り残されている。周溝の埋土は基本的に暗茶褐色砂質土である。遺物はほとんど出土していないが、遺構の時期は弥生時代中期後葉と考える。

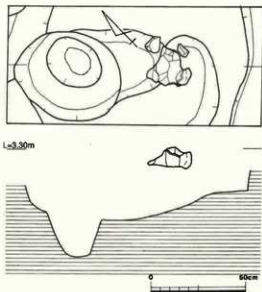
## SZ-6 (第12・13図)

B-1区で検出された。周溝であるB-1区SK-1・23・40・43によって区画され、平面形は方形を呈すると思われるが、地山のにじみにより周溝を掘りすぎたため不整形である。盛土はすでに削平されて主体部は残っていない。規模は周溝の内側で東西2.8m、南北2.9m、外側で東西5.3m、南北5.2mを測る。周溝の規模は、B-1区SK-1が長さ2.15m、幅0.85m、深さ0.4mを測る。またB-1区SK-43はSZ-6に伴うのが北半部分だけであろう。なお、各周溝間の四隅は陸橋状に掘り残されている。周溝の埋土は基本的に暗茶褐色砂質土であるが、流入の方向は判然としない。

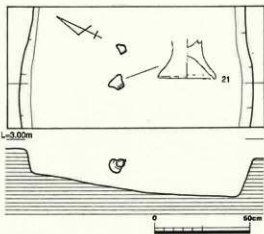
遺物はB-1区SK-40・43から出土している(第13図)。前者からは細頸壺・甕など(第22図15・16、第23図17)が、後者からは底から浮いた状態で壺など(第23図18~20)があり、遺構の時期は弥生時代中期後葉、古井式期と考える。

## SZ-7 (第12・14図)

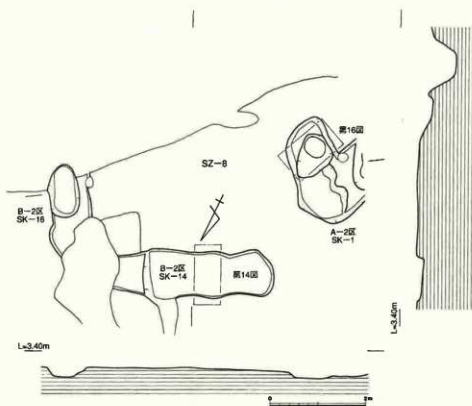
B-2区で検出された。周溝であるB-1区SK-43、B-2区SK-12・14・29によって区画され、平面形は方形を呈すると思われるが、地山のにじみにより周溝を掘りすぎたため不整形である。盛土はすでに削平されて主体部は残っていない。規模は周溝の内側で東西・南北とも2.8m、外側で東西4.6m、南北とも



第13図 B-1区SK-43出土状況(1/20)



第14図 B-2区SK-14出土状況(1/20)



第15図 SZ-8 (1/80)

2.8m、外側で東西4.6m、南北5.6mを測る。周溝の規模は、B-2区SK-14が長さ2.8m、幅0.9m、深さ0.2mを測る。またB-1区SK-43はSZ-7に伴うのが北半部分だけであろう。なお、各周溝間の四隅は陸橋状に掘り残されている。周溝の埋土は基本的に暗茶褐色砂質土である。

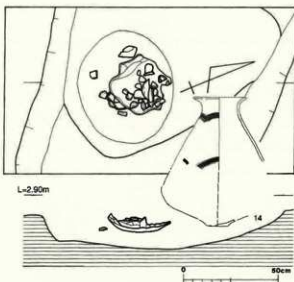
遺物として、B-2区SK-14から甕が出土しており（第14図・第23図21）、遺構の時期は弥生時代中期後葉と考える。

#### SZ-8（第15・16図）

A・B-1区で検出された。周溝であるA-2区SK-1、B-2区SK-14・16によって区画

され、平面形は方形を呈すると思われるが、南東側は近世の溝によって切られている。盛土はすでに削平されて主体部は残っていない。規模は周溝の内側で東西4.6m、外側で東西6.0mを測る。周溝の規模は、B-2区SK-16が幅0.9m、深さ0.25mを測る。なお、各周溝間の四隅は陸橋状に掘り残されている。周溝の埋土は基本的に暗茶褐色砂質土であるが、流入の方向は判然としない。

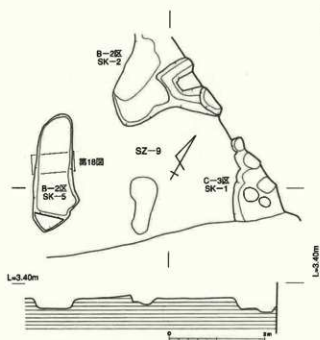
遺物はA-2区SK-1、B-2区SK-14から出土している（第14・16図）。このうち前者から



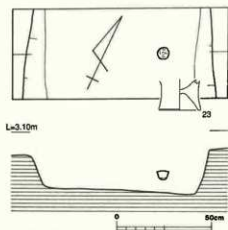
第16図 A-2区SK-1 出土状況 (1/20)



太頸壺(第22図14)が横転して、底から10cmほど浮いた状態で出土しており、遺構の時期は弥生時代中期後葉、古井式期と考える。



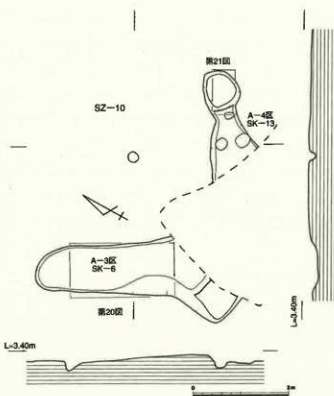
第17図 SZ-9 (1/80)



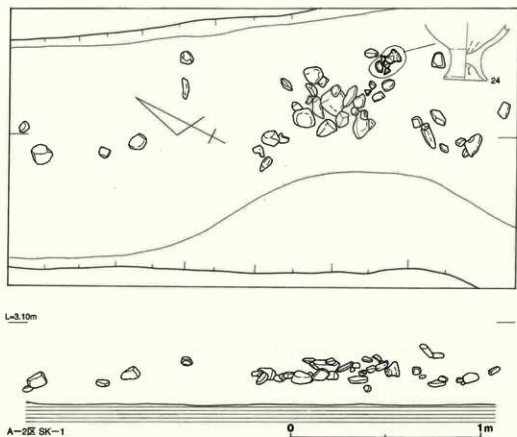
第18図 B-2区SK-5出土状況 (1/20)

SZ-9 (第17・18図)  
 B・C-2・3区で検出された。周溝であるB-2区SK-2・5によって区画され、平面形は方形を呈する。盛土はすでに削平されて主体部は残っていない。規模は周溝の内側で東西3.4m、外側で東西5.3mを測る。周溝の規模は、B-2区SK-5が長さ2.5m、幅0.1m、深さ0.25mを測る。なお、各周溝間の四隅は陸橋状に掘り残されている。周溝の埋土は基本的に暗茶褐色砂質土であるが、流入の方向は判然としない。

遺物はB-2区SK-2・5から出土している(第18図)。前者からは条痕文土器の壺(第23図22)が、後者からは甕(第23図23)が出土しており、遺構の時期は弥生時代中期後葉と考える。



第19図 SZ-10 (1/80)

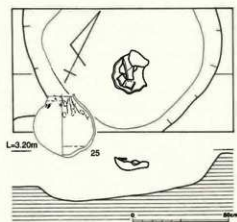


第20図 A-3区SK-6出土状況 (1/20)

## SZ-10 (第19~21図)

A-4区で検出された。周溝であるA-3区SK-6およびA-4区SK-13によって区画され、平面形は方形を呈すると思われるが、北・東側を画する周溝は未検出である。また隅角が攪乱を受けるため、周溝間の掘り残しは確認できない。盛土はすでに削平されて主体部は残っていない。規模は周溝の内側で東西3.5m、南北3.7mを測る。周溝の規模は、A-3区SK-6が幅1.1m、深さ0.2m、A-4区SK-13が幅0.9m、深さ0.15mをそれぞれ測る。周溝の埋土は基本的に暗茶褐色砂質土であるが、流入の方向は判然としなかった。なお、ほかのように周溝を共有しあうものではなく独立型の方形周溝墓と考えられる。

遺物はA-3区SK-6およびA-4区SK-13から出土している(第20・21図)。前者からは多数の円礫に混じって甕(第23図24)が底から20cmほど浮いて、後者からは細頸壺(第23図25)が底から15cmほど浮いて出土しており、遺構の時期は弥生時代中期後葉、古井式期と考える。



第21図 A-4区SK-13出土状況 (1/20)

## 方形周溝墓出土遺物 (第22・23図)

1・3次調査で検出された方形周溝墓からは、弥生時代中期後葉に属する土器が出土した。今回の調査でも方形周溝墓から遺物は出土しているが、その数は極めて少なく、また完形を呈するものは皆無である。1・3次調査の出土土器群は、祭祀行為のほか恒常的な土器廃棄の存在を想像させるが、今回の場合は墓上に供献された土器群が、破損し周溝内に転落したものであると思われる。確認できる土器はいずれも古井式に属するもので、長床式のものは見られない。

なお、遺構埋土の性格によるものか、土器表面の剝離や摩滅がいずれも著しい。

## A-1区SD-1 (1~9) : SZ-1

1は弥生土器の細頸壺である。体部は円錐形に広がり、外面には二枚目の刺突による連弧文が2段見られる。2~6は同壺と思われる。いずれも外面にナデ調整が施されたのち、櫛描文が描かれる。2は横線文ののち縦位の櫛描文が、3は横線文と連弧文が、4は横線文ののち縦位の櫛描文が、5は横線文、波状文、縦位の櫛描文が、6は連弧文ののち波状文がそれぞれ施文される。7は同壺の底部と考えられ、内面には指押さえが見られる。8は同鉢と思われるが、壺の可能性も否定できない。口縁端部をわずかに内側に折り返し、外面には櫛描の波状文と連弧文が見られる。9は磨製石斧で、蛤刃石斧の一部である。刃部先端付近には縦方向の研磨痕が認められる。石材は塩基性岩である。

## A-1区SD-2 (10~12) : SZ-3

10は弥生土器の太頸壺である。なで肩の体部から口縁部が直線的に開き、摩滅は著しいが端部は丸く収めるようである。11は同壺と思われる。外面に櫛描の波状文と連弧文が見られる。12は同壺の脚部破片であろう。

## A-1区SD-3 (13) : SZ-3・4

13は弥生土器の甕の脚部破片である。接合部付近は厚みを持ち、体部内面には煤が付着する。

## A-2区SK-1 (14) : SZ-4・8

14は弥生土器の太頸壺である。体部下半は欠損しているため、図上復元した。口縁部は緩やかに外反し、端部を丸く収める。体部が肩が張らずに円錐形を呈し、最大径は恐らく体部下半にあるだろう。全体に摩滅が著しいが、口縁部の下と体部の中央付近に櫛描連弧文がそれぞれ認められる。

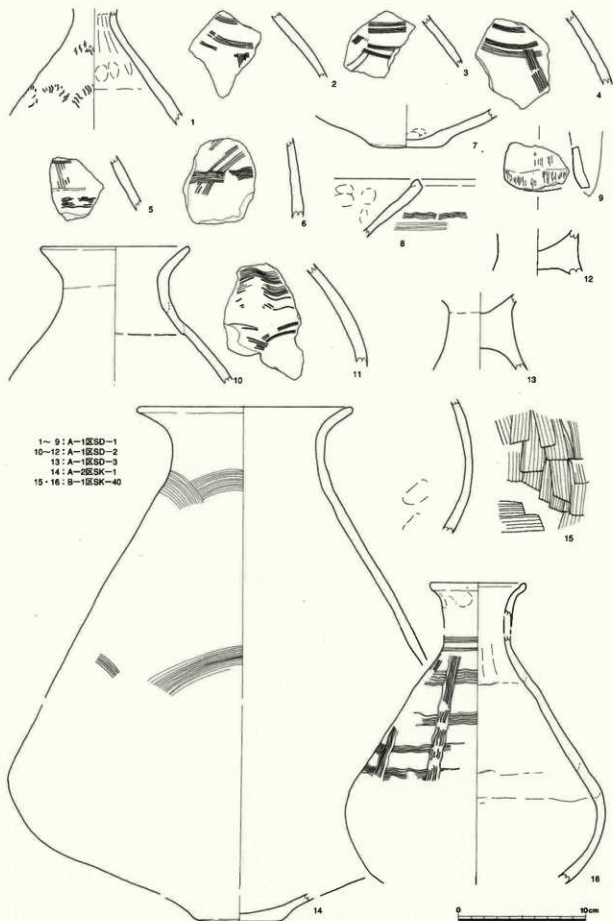
## B-1区SK-40 (15~17) : SZ-6

15は弥生土器の甕の体部で、外面には縦方向のハケメが施される。16は同細頸壺で、頸部付近を欠損するため図上で復元した。口縁部はわずかに受口となり、体部は肩が張らず円錐形に広がる。頸部には櫛描横線文が、体部上半には横位と縦位の櫛描波状文が見られる。17は同壺で、外面には粗い櫛描文とヘラ描斜格子文が見られる。

## B-1区SK-43 (18~20) : SZ-6・7

18~20は弥生土器の壺と思われる。18には櫛描波状文とヘラ描斜格子文が、19は表面が著しく摩滅するが、棒状工具による沈線文、ヘラ描斜格子文、縦位の櫛描波状文が、20には櫛描連弧文がそれぞれ見られる。

## B-2区SK-14 (21) : SZ-7・8



第22図 方形周溝墓出土土器一 (1/3)

21は弥生土器の甕の脚部である。裾はハの字形に広がり、また端部内面を窪ませている。

B-2区SK-2 (22) : SZ-9

22は弥生土器の壺の肩付近である。外面は条痕調整され、ほかとは時期が異なるものであろう。

B-2区SK-5 (23) : SZ-9

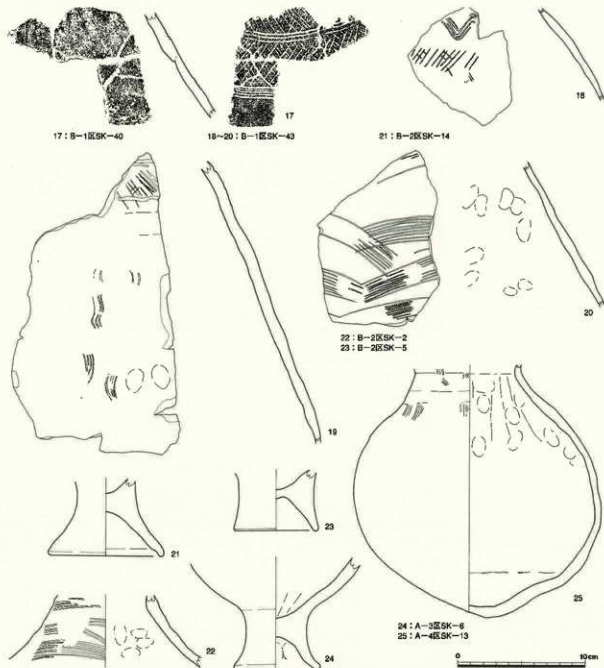
23は弥生土器の甕の脚部である。あまり外反することなく、短いものである。

A-3区SK-6 (24) : SZ-10

24は弥生土器の甕の体部および脚部である。脚部は低く、また緩く外反させる。

A-4区SK-13 (25) : SZ-10

25は細頸壺である。器形は体部中位が大きく膨らみ、底部の平坦面は狭い。また全体に摩滅が著しいが、肩から頸部付近にわずかにハケメが遺存する。



第23図 方形周溝墓出土土器-2 (1/3)

第1表 方形周溝墓出土遺物観察表

( ) の数値は残存値を示す

番号	種類	器種	地区名	遺構名	法 量 (cm)				残存 率%	胎土	色 調	焼 成	調 整	備 考
					口径	器高	底径	器厚						
1	弥生土器	細頸壺	A-1	SD-1	(9.1)			3.3	15	密	暗褐色	良好	内面ナデ・指押さえ、頸部にしぼり目、外面二枚貝の連続刺突による連弧文	
2	弥生土器	壺	A-1	SD-1	(4.6)					密	茶褐色	良好	ナデ、外面に横位・縦位の櫛描文	
3	弥生土器	壺	A-1	SD-1	(3.9)					密	淡茶褐色	良好	外面に櫛描横線文・連弧文、全体に摩滅	
4	弥生土器	壺	A-1	SD-1	(5.8)					密	淡茶褐色	良好	ナデ、外面に横位・縦位の櫛描文	
5	弥生土器	壺	A-1	SD-1	(4.2)					密	茶褐色	良好	ナデ、外面に横位・縦位の櫛描文・同波状文	
6	弥生土器	壺	A-1	SD-1	(6.3)					密	茶褐色	良好	ナデ、外面に櫛描連弧文・波状文、全体に摩滅	
7	弥生土器	壺	A-1	SD-1	(2.8)	4.5			5	密	淡褐色	良好	内面ナデ・指押さえ、外面ナデ、全体に摩滅	
8	弥生土器	鉢	A-1	SD-1	(4.5)					密	茶褐色	良好	内面ナデ・指押さえ、外面ナデ、櫛描波状文・横線文、全体に摩滅	
9	弥生土器	石片	A-1	SD-1	長さ(3.7)、幅(5.1)、厚さ(0.8)								刃部に研磨痕	石材・塩基性岩
10	弥生土器	大頸壺	A-1	SD-2	11.4 (10.8)		8.3		20	密	茶褐色	良好	全体に摩滅	
11	弥生土器	壺	A-1	SD-2	(8.0)					密	暗褐色	良好	外面に櫛描波状文・連弧文、全体に摩滅	
12	弥生土器	甕	A-1	SD-2	(3.3)				5	密	橙褐色	良好	摩滅	
13	弥生土器	甕	A-1	SD-3	(5.8)				5	密	橙褐色	良好	摩滅	内面に裏付着
14	弥生土器	大頸壺	A-2	SK-1	16.9 (40.5)	6.9	12.0		50	密	淡茶褐色	良好	ナデ、外面櫛描連弧文、全体に摩滅	
15	弥生土器	甕	B-1	SK-40	(10.5)					密	淡褐色	良好	内面ナデ・指押さえ、外面ハケ目・ナデ	
16	弥生土器	壺	B-1	SK-40	7.6 (33.9)		20.4		50	密	暗褐色	良好	内面ナデ・摩滅、外面は口縁部に指押さえ、体部摩滅(ミガキカ)、櫛描横線文・横位と縦位の波状文	
17	弥生土器	壺	B-1	SK-40	(6.2)					密	茶褐色	良好	内面ナデ・指押さえ、外面櫛描横線文・ヘラ描斜格子文	
18	弥生土器	壺	B-1	SK-43	(6.7)					密	茶褐色	良好	外面ナデ、櫛描波状文・ヘラ描斜格子文、全体に摩滅	
19	弥生土器	壺	B-1	SK-43					10	密	暗褐色	良好	内面ナデ・指押さえ、外面棒状工具の沈線文、ヘラ描斜格子文、縦位の櫛描波状文、全体に摩滅	
20	弥生土器	壺	B-1	SK-43						密	茶褐色	良好	内面ナデ・指押さえ、外面ナデ・櫛描連弧文	
21	弥生土器	甕	B-2	SK-14	(5.9)	8.9			5	密	淡茶褐色	良好	全体に摩滅	
22	弥生土器	壺	B-2	SK-2	(5.7)				3	密	橙褐色	良好	内面ナデ・指押さえ、外面条痕文	
23	弥生土器	甕	B-2	SK-5	(4.8)	6.4			5	密	暗褐色	良好	内面ナデ・指押さえ、外面ナデ・摩滅	
24	弥生土器	甕	A-3	SK-6	(8.8)	6.7			10	密	淡褐色	良好	ナデ、摩滅、内面指押さえ、底部ヨコナデ・黒斑	
25	弥生土器	壺	A-4	SK-13	(19.5)	3.6	19.5	7.5	75	密	橙褐色	良好	内面ナデ・指押さえ、外面ハケ目・摩滅	図上復元

## 3. 土器棺墓 (第12・24・25図)

SZ-6・7の周溝であるB-1区SK-43と重複して、土器棺墓が検出された。橋良遺跡では初めて検出された土器棺墓である。

**遺構の状況 (第12・24図)** 本来は掘方内に存在したと思われるが、平面的には判別できていない。従って掘方内に存在した土器とB-1区SK-43に伴う土器とを明確に分別できておらず、土器棺自体とその周辺に存在した土器片を土器棺墓の資料として以下では扱っている。したがって土器棺墓とB-1区SK-43との切り合い関係も不明確だが、土器棺自体の遺存状態が良好なことから、この土器棺墓は周溝の埋没後、方形周溝墓の裾に新たに設けられたものとする。ちなみに、土器棺自体は、B-1区SK-43の底から10cmほど浮いた状態で出土している。

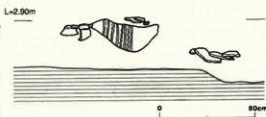
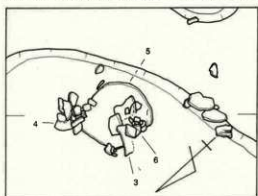
土器棺には、弥生土器の大型の太頸壺(第25図5)を用い、口縁部を南東に向け、横位に置かれていた。表上直下のごく浅いところから検出されており、上半部はすでに失われていた。土器棺の口縁部付近には別個体の壺の底部(同4)があり、その破片が土器棺の口縁部に被さっている部分もあることから、これを蓋にしていたと考えられる。なお蓋は外面を土器棺の外側に向けていた。

土器棺内に落ち込む形で、さらに別個体の壺の底部(同3)、甕(同6)が出土している。これらが土器棺に本来伴うものかは明らかではないが、出土状況から見て少なくとも土器棺の掘方内には存在していたものだろう。これらが土器棺に伴う副葬品であった可能性もあるが、現状では埋土内に偶然混入したものである可能性も否定できない。なお棺内には、人骨などの内容物はまったく認められなかった。

この土器棺墓は、前述のように方形周溝墓の周溝が埋没した後に設けられたものであろう。この地が継続的に墓域として認識され続けた傍証と言える。

**出土遺物 (第25図)** 土器棺墓の出土遺物には、棺と蓋、そしてその周辺から出土したものがある。

1～3、6は土器棺の周辺と崩壊した土器棺の内部に重なるようにして存在した遺物である。1は弥生土器の太頸壺である。頸部付近の破片で、外面には粗い



第24図 土器棺墓出土状況 (1/20)

第2表 土器棺墓出土遺物観察表

( ) の数値は残存値を示す

番号	種類	器種	法量(cm)				残存 率%	胎土	色調	焼成	調整	備考	
			口径	器高	底径	胴径							
1	弥生土器	壺	(5.5)		10.9		5	密	淡茶褐色	良好	内面ナデ・指押さえ、外面ナデ・帯横線文		
2	弥生土器	壺	(4.4)				5	密	茶褐色	良好	内面指押さえ・摩滅、外面帯横線文	外面に煤付着	
3	弥生土器	壺	(4.8)	4.4				密	淡茶褐色	良好	内面指押さえ、全体に摩滅		
4	弥生土器	壺	(4.0)	6.8			5	密	淡褐色	良好	全体に摩滅		
5	弥生土器	太頸壺	17.8	41.5	6.0	9.8	34.6	50	密	淡茶褐色	良好	内面ナデ・指押さえ、口縁部ヨコナデ、外面は口縁部ヨコナデのちハケ目、体部上位ハケ目のち帯横線文・波状文、中位横方向のミガキ、下位縦方向のナデ	
6	弥生土器	壺	(10.2)				10	密	淡褐色	良好	内面ナデ・摩滅、口縁部ヨコナデ、外面ハケ目・摩滅		

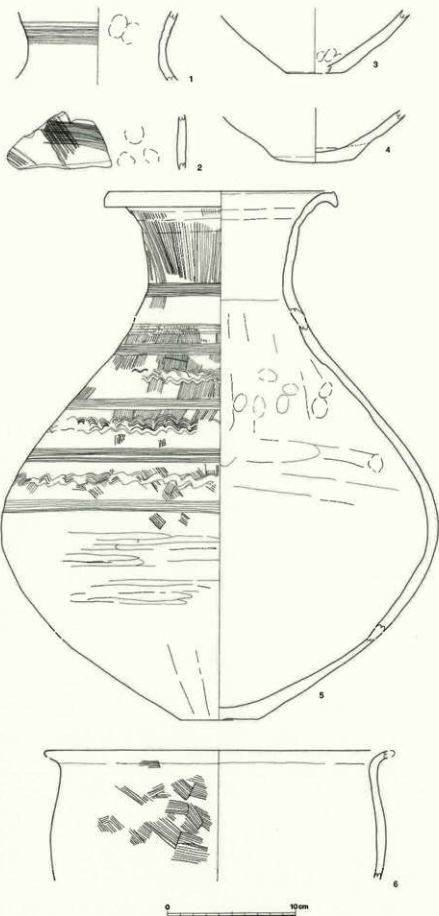
備描横線文が見られる。

2は同壺で、外面に備描連弧文が見られる。3は同壺の底部で、内面には指押さえ痕が見られる。6は同壺で、口縁部は緩やかに外反し、端部は欠損している。体部外面にはハケ目が見られる。

4は弥生土器の壺の底部で、土器棺の蓋として使用されたものである。全体的に摩滅が著しい。

5は土器棺本体である。半分を失っているが、口縁端部から底部までほぼ全形を確認できる。弥生土器の大頭壺で、口縁部は強く外反し、端部は縁帯を成す。体部中央のやや下位に最大径がある。縁帯外面の凹線文の有無は摩滅のためよく分からない。内面は体部上位が縦位のナデ、中位が横方向のナデである。外面は口縁部が縦位のハケ目、頸部～体部上半がハケ目のち備描横線文・波状文、体部下半が横位と縦位のミガキである。

遺構の所属時期 出土遺物は古井式である2を除いて、いずれも弥生時代中期後葉、長床式期に位置づけられる。



第25図 土器棺墓出土遺物実測図 (1/3)



#### 4. 溝 (第5・7・26~39図)

調査区内からは大小さまざまな溝が検出されている。調査時には溝状を呈する土壌を溝として扱ったものがあつたが、ここでは比較的規模が大きく、まとまって遺物が出土したのもののみを取り上げる。溝には弥生時代中期後葉の環濠(A-2区SD-5)をはじめ、同時期の性格不明の溝(A-4区SD-1)、戦国時代の性格不明の溝(A-2区SD-6)、近世の屋敷地の区画溝と考えられるもの(A-2区SD-1~4)などが検出されている。

##### A-2区SD-1 (第5・7・26~28図)

A・B-2・3区で検出された溝で、A-2区SD-2~4と重複しており、何度か掘り直された一連の溝の一部だが、ほかに比べて規模が大きい。

**遺構の状況 (第5・7図)** 北東から南西に向かって直線的に伸びる溝で、主軸方位はN-49°-Eである。調査区外へと伸びるため全長は不明だが、規模は幅1.3m前後とほぼ一定している。断面形はU字形または逆台形で、深さは約0.75mである。また北東端と南西端で高低差は10cm程度あり、わずかに南西側が低くなっている。埋土は暗茶褐色砂礫で、埋土の大半は円礫だった。切り合い関係から、A-2区SD-2・3よりも新しく、同SD-4よりも古いことが分かる。

**出土遺物 (第26~28図)** 1~9は弥生土器である。1・2は大頸壺で、1は口縁部が受口状となり、口縁端部は丸く収める。2は頸部付近の破片で、頸部と体部の境界は比較的しっかりと屈曲する。外面には櫛描横線文と櫛の連続刺突が認められる。3~6は壺である。3は口縁部片で、緩やかに外反し、端部は丸く収める。外面には櫛描波状文が見られる。4~6は頸部から肩付近で、4は外面に2条の沈線が見られる。5は頸部に断面三角形の低い突帯が付く。6は外面に櫛描横線文が見られる。7は鉢、または高環である。口縁端部は丸く収め、口縁部内面にはハケ目が見られるほか、内外面ともナデ調整される。8・9は甕の脚部の接合部付近である。

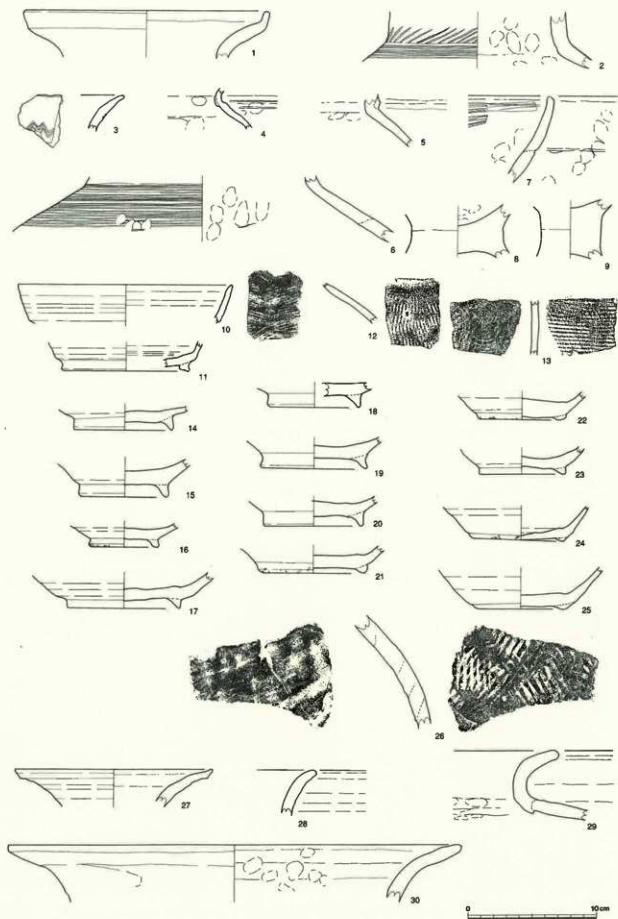
10~13は須恵器である。10・11は坏、12・13は甕の体部片で、12は断面がセピア色を呈している。いずれも湖西窯産と思われる。

14は灰釉陶器の碗である。底部には回転糸切り痕が見られる。

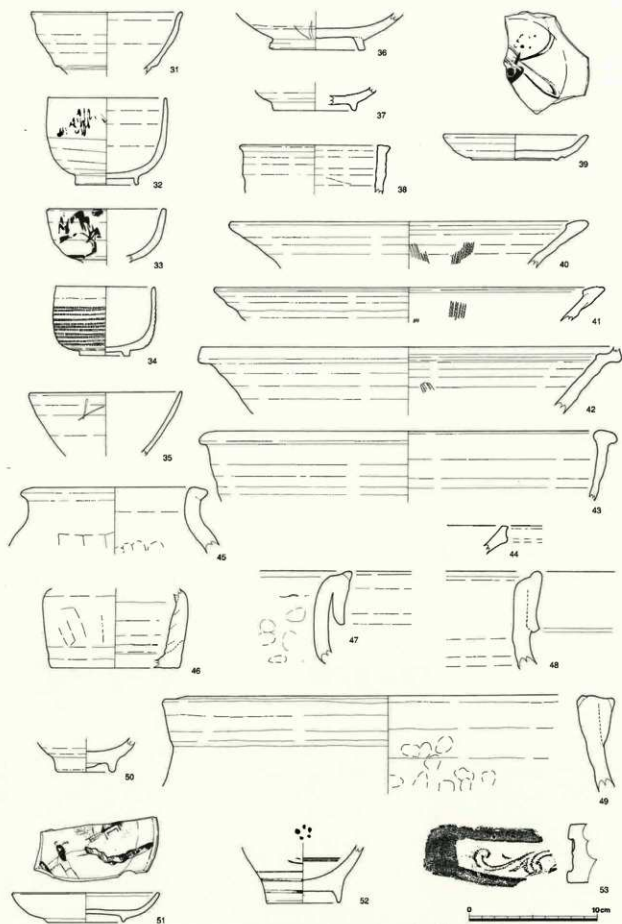
15~30は中世陶器である。14~25は碗で、24が尾張型山茶碗であることを除けば、すべてが渥美・湖西型山茶碗である。このうち高く外開きとなる高台を持った14~20は山茶碗編年のⅠ期、やや高台の潰れた21~23はⅡ~Ⅲ期、低平な高台を持つ25はⅢ期に比定される。また24は藤澤良祐の山茶碗編年〔藤澤1994〕における第6型式に比定される。27・28は壺である。27は口縁端部外面に面を持ち、内面には自然釉がかかる。28は口縁部で、厚手のものである。26・29・30は甕である。26は体部片で、外面にはタタキ痕が見られる。29・30は口縁部で、29は強く外反し、端部は丸く収める。一方30は端部に面を持ち、内外面に灰釉をハケ塗りするなど、中世陶器の甕としては古相を呈している。

31~49は陶器である。施釉された瀬戸美濃窯産陶器(31~44)と、無釉の常滑窯産陶器(45~49)とに大きく分けることができる。

31~35は碗類である。31は天目茶碗で、口縁部の屈曲は緩く、端部は丸く収める。内外面には鉄釉



第26図 A-2区SD-1出土遺物実測図-1 (1/3)



第27図 A-2区SD-1出土遺物実測図-2 (1/3)

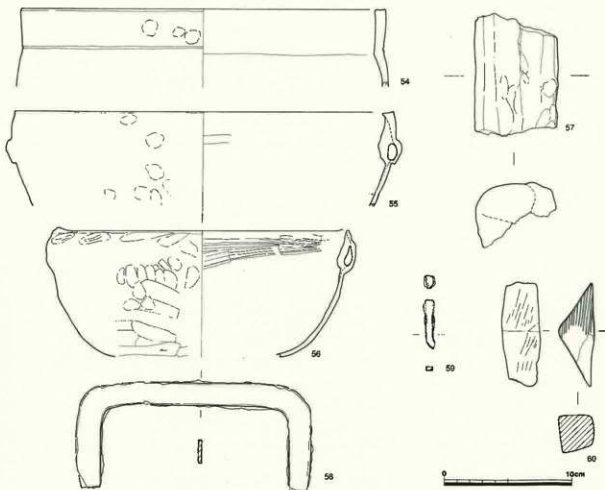
が施される。藤澤編年〔藤澤1991〕の大窯第3段階に比定される。32は御室茶碗で、内外面に灰釉が施される。33は一般に「長の」と呼ばれる呉須絵の碗である。34は鑑湯呑で、内面および口縁部外面に鉄釉、それ以外に灰釉が施される。35は外面にヘラ描の文様が見られる。これらは32が18世紀中葉、そのほかが18世紀後葉に位置づけられる。

36は片口である。内面には灰釉が見られる。37は瓶類で、内面には灰釉が、外面には鉄釉が施される。36は19世紀中葉のものである。38は香炉で、口縁部は内外面に肥厚し、端部は面となる。内外面には鉄釉が施される。大窯期のものである。39は鉄絵皿で、高台は削り出しである。内面には蘭竹の鉄絵が描かれる。連房2小期〔藤澤1989〕に比定される。

40～42・44は摺鉢である。40・41は口縁端部を内側へ折り返し、42は口縁部が屈曲して端部は縁帯を形成する。44は端部外面を窪ませている。40・41は大窯第3段階、42は連房2小期、44は大窯第1段階にそれぞれ比定される。なお、42は口縁端部が砥石代わりに利用され、欠損している。43は鉢鉢で、口縁部を外側に折り曲げる。18世紀後葉のものである。

45・46は壺である。45は口縁端部を外側に折り曲げ、内外面をナデる。46は内面に粘土紐の積上げ痕が顕著で、べったりと鉄分が付着している。底部は未調整である。47～49は甕で、47は中野編年〔中野1994〕の8～9型式に、49は12型式にそれぞれ比定される。

50～52は磁器である。50は青磁碗の底部で、高台は削出しである。51は染付皿で、近代のものと思われる。52は妬器質の広東碗で、19世紀前葉のものである。



第28図 A-2区SD-1出土遺物実測図-3 (1/3)

53は軒平瓦で、瓦当には複線表現の唐草文が認められる。

54～56は土師器の鍋である。54は内湾した口縁部を持ち、端部は平坦である。頸部外面には1条の沈線が巡る。55・56は半球形の鍋である。55は口縁端部に面を持つ。また56は口縁端部をとがらせ、また内耳の上をわずかに上方に突出させている。口縁部外面は規則的に指押さえされる。

57は土製支脚の一部である。粘土板を巻いて成形しており、外面の調整はナデである。

58・59は鉄製品である。58は不明品で、形状は鏡に似るが、厚みは薄く、端部は尖らずに直線的になる。59は釘で、頭を折り曲げている。

60は砥石である。2面に使用痕が認められ、ほかの面には加工時におけるハケメ状の粗い削痕が観察される。石材は凝灰岩である。

遺構の所属時期 出土遺物の時期には弥生時代中期後葉、古代、中世前期、同後期、近世、近代が認められる。このうち近代の遺物はごく少数で、近世でも18世紀～19世紀前葉に時期が集中する傾向にある。恐らく近世末期に存在した溝であろう。屋敷地を区画した溝と考えるが、この場合一般的な例と比較して明らかに規模は大きい。

第3図 A-2区SD-1出土遺物観察表

( ) の数値は残存値を示す

番号	種類	器種	法量(cm)			胎土 残存率%	色調	焼成	調整	備考
			口径	器高	底径					
1	弥生土器	太煎壺	19.2	(3.7)			5密	橙褐色	良好	内外面とも摩滅
2	弥生土器	太煎壺		(4.4)	14.6		5密	淡褐色	良好	内外面ともナデ、内面指押さえ・摩滅、外面斜位の磨削突・磨損横線文
3	弥生土器	壺		(2.8)			密	淡橙褐色	良好	ナデ・摩滅、外面に磨損波状文
4	弥生土器	壺		(3.1)			密	淡褐色	良好	内面ナデ・指押さえ、外面ナデ・沈線
5	弥生土器	壺		(4.2)			密	淡褐色	良好	内面ナデ・指押さえ、外面ナデ・頸部に突帯
6	弥生土器	壺		(5.2)	18.5		5密	淡褐色	良好	内面指押さえ、外面磨損横線文
7	弥生土器	高坏・鉢		(6.8)			密	淡褐色	良好	ナデ、指押さえ、内面上位にハケ目
8	弥生土器	壺		(4.1)	7.3		5密	淡褐色	良好	ナデ、内外面とも摩滅
9	弥生土器	壺		(4.5)	4.7		5密	橙褐色	良好	内外面とも摩滅
10	須恵器	坏	16.9	(3.0)			5密	淡灰色	良好	回転ナデ
11	須恵器	坏		(2.2)	10.2		10密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転へう削り、高台貼付け
12	須恵器	甕		(2.6)			密	淡灰色	良好	ナデ、内面当具痕、外面平行タタキ目
13	須恵器	甕		(4.3)			密	灰色	良好	ナデ、内面当具痕、外面平行タタキ目
14	灰輪陶器	碗		(1.8)	7.8		30密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り、高台貼付け
15	灰輪陶器	碗		(3.0)	6.7		30密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り、高台貼付け
16	中世陶器	碗		(1.8)	5.3		20密	淡灰色	良好	回転ナデ、高台貼付け 内面に自然釉、 瀬美・瀬西型Ⅰ期
17	中世陶器	碗		(2.7)	8.9		50密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切りのちナデ、高台貼付け・粉痕 内面に自然釉、 瀬美・瀬西型Ⅰ期
18	中世陶器	碗		(2.0)	7.0		5密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り、高台貼付け 瀬美・瀬西型Ⅰ期
19	中世陶器	碗		(2.4)	8.2		15密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り、高台貼付け 瀬美・瀬西型Ⅰ期
20	中世陶器	碗		(2.3)	7.6		35密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り、高台貼付け 内面に自然釉、 瀬美・瀬西型Ⅰ期
21	中世陶器	碗		(2.2)	8.1		50密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り、高台貼付け・粉痕 瀬美・瀬西型Ⅰ～Ⅱ期
22	中世陶器	碗		(2.2)	6.4		30密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部ナデ、高台貼付け・粉痕 瀬美・瀬西型Ⅰ～Ⅱ期
23	中世陶器	碗		(2.0)	6.7		40密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切りのちナデ、高台貼付け・粉痕 瀬美・瀬西型Ⅰ～Ⅱ期
24	中世陶器	碗		(2.8)	7.1		40密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り、高台貼付け・粉痕 尾張型第6形式 内面に自然釉、瀬 美・瀬西型Ⅲ期
25	中世陶器	碗		(3.3)	6.8		40密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り、高台貼付け

( ) の数値は残存値を示す

番号	種類	器種	法量 (cm)				残存率 (%)	胎土	色調	焼成	調整	備考
			口径	器高	底径	胴径						
26	中世陶器	甕	(9.0)				5	密 淡褐色	不良	ナデ、内面磨押さえ、外面平行タタキ目		
27	中世陶器	壺	(2.9)	15.7			5	密 淡灰色	良好	回転ナデ、内面に自然輪		
28	中世陶器	甕	(3.5)				5	密 淡灰色	良好	回転ナデ、灰輪		
29	中世陶器	甕	(5.5)	35.8			5	密 灰色	良好	口縁部ヨコナデ、胴部内面磨押さえ、外面に自然輪		
30	中世陶器	甕	(4.4)				20	密 淡褐色	良好	口縁部ヨコナデ、外面灰輪ハケ塗り		
31	陶器	天目茶碗	11.8	(4.9)				密 淡褐色	良好	回転ナデ、外面下位に回転ヘラ削り	大室第3段階	
32	陶器	御茶碗	9.4	6.8	5.1		75	密 淡灰色	良好	回転ナデ、底部外面回転ヘラ削り、貼付け高台、外面に負須絵	灰輪、瀬戸窯産、18世紀中葉	
33	陶器	碗	9.0	(4.2)			10	密 淡灰色	良好	回転ナデ、灰輪、外面に負須絵・下位に1条の沈線	灰輪、瀬戸窯産「長」の碗、18世紀後葉	
34	陶器	鋳湯呑	7.8	5.4	3.9		45	密 灰色	良好	回転ナデ、底部回転ヘラ削り・削出し高台	内面・口縁部鉄輪、外面灰輪、瀬戸窯産、18世紀後葉	
35	陶器	碗	12.0	(5.0)			10	密 淡灰色	良好	回転ナデ	灰輪、美濃窯産、18世紀後葉	
36	陶器	片口	(2.8)	7.0			30	密 淡灰褐色	良好	回転ナデ、底部外面回転ヘラ削り・ヘラによる線刻、貼付け高台	灰輪、瀬戸美濃窯産、19世紀中葉	
37	陶器	瓶類	(1.8)	6.6			5	密 淡褐色	良好	回転ナデ、底部外面回転ヘラ削り、削出し高台	内面灰輪、外面鉄輪、美濃窯産	
38	陶器	香炉	10.3	(3.7)			5	密 淡灰色	良好	回転ナデ	鉄輪、瀬戸美濃窯産、大室製品	
39	陶器	鉄絵皿	11.2	3	6.8		40	密 淡褐色	良好	回転ナデ、底部外面回転ヘラ削り、削出し高台	長石輪、瀬戸美濃窯産、連房2小間	
40	陶器	摺鉢	28.0	(3.6)		33.8	5	密 淡褐色	良好	回転ナデ、内面に欄目	鉄輪、瀬戸美濃窯産、大室第3段階	
41	陶器	摺鉢	36.0	(2.7)			5	密 淡灰色	良好	回転ナデ、内面に欄目	鉄輪、瀬戸美濃窯産、大室第3段階	
42	陶器	摺鉢	(5.1)				5	密 淡灰色	良好	回転ナデ、内面に欄目	鉄輪、瀬戸窯産、連房2小間	
43	陶器	摺鉢	30.4	(5.5)			5	密 淡褐色	良好	回転ナデ	灰輪、瀬戸窯産、18世紀後葉	
44	陶器	摺鉢	(2.2)					密 淡茶褐色	良好	回転ナデ	鉄輪、瀬戸美濃窯産、大室第1段階	
45	陶器	壺	12.7	(5.2)				密 淡灰色	良好	口縁部回転ナデ、体部内面磨押さえ、外面ナデ	常清窯産	
46	陶器	壺	(6.2)	11.1			5	密 淡灰色	良好	内面ナデ、外面ケズリ・ナデ、底部未調整	内面に鉄分がべったり付着、常清窯産	
47	陶器	甕	(7.3)					密 淡灰褐色	良好	内面ナデ・指押さえ、口縁部緑帯ヨコナデ	常清窯産、8-9型式	
48	陶器	甕	(7.0)					密 淡褐色	良好	ナデ、口縁部緑帯ヨコナデ	常清窯産、10型式	
49	陶器	甕	32.4	(7.4)			5	密 淡灰色	良好	ナデ、口縁部緑帯ヨコナデ	外面に自然輪、常清窯産、12型式	
50	磁器	碗	(2.5)	4.3			30	密 淡灰白色	良好	回転ナデ、削出し高台、裏合接地面露胎	曹田輪	
51	磁器	碗	11.5	2.2	6.2		25	密 淡灰色	良好	回転ナデ、削出し高台、内面に負須絵	明治以降、非瀬戸窯産	
52	磁器	碗	(4.5)	5.7			30	密 淡灰色	良好	回転ナデ、削出し高台、内外面に負須絵	拓器質、透明輪、19世紀後葉	
53	瓦製品	瓦	(4.5)					密 淡灰色	良好	ナデ、瓦当面に模範表現の唐草文		
54	土師器	鉢	28.8	(6.0)			5	密 淡褐色	良好	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ナデ・指押さえ、胴部に1条の沈線	外面に膠付着	
55	土師器	鉢	30.0	(7.4)			5	密 淡褐色	良好	口縁部ヨコナデ、外面ナデ・指押さえ	外面に膠付着	
56	土師器	鉢	23.0	(10.1)			50	密 茶褐色	良好	口縁部ヨコナデ、口縁部内面ハケ目、体部外面磨押さえ・ケズリ	外面に膠付着	
57	土師器	支脚	長さ(9.7)、幅(6.7)、厚さ(5.0)					密 橙褐色	良好	ナデ、磨押さえ		
58	金属器	不明品	長さ18.9、幅8.6、厚さ0.3				100				かすかひ?	
59	金属器	鉄釘	長さ3.8、幅0.9、厚さ0.3									
60	石製品	砥石	長さ8.2、幅2.8、厚さ3.0							使用痕あり	石材・凝灰岩	

## A-2区SD-2・3 (第5・7・29図)

A・B-2・3区で検出された溝で、A-2区SD-1と重複している。何度か掘り直された一連の溝の一部である。埋土の違いからSD-2・3と分別したが、同一の溝の掘り直しである可能性も否定できない。

**遺構の状況** (第5・7図) 北東から南西に向かって直線的に延びる溝で、主軸方位はN-50°-Eである。調査区外へと延びるため全長は不明で、規模もSD-1に切られているため本来の幅は分からないが、現状では幅1.9m前後とほぼ一定している。断面形は浅いU字形で、深さは約0.15mである。また北東端と南西端との高低差はほとんど無い。埋土はSD-2が暗灰褐色砂質土、SD-3が淡茶褐色砂質土である。切り合い関係から、A-2区SD-2の方がSD-3よりも新しく、さらにSD-1の方が新しいことが分かる。

**出土遺物** (第29図) 1～3は中世陶器である。1は小皿で、体部は直線的に立ち上がり、底部には回転糸切り痕が見られる。2・3は碗である。いずれも高台は高く、底部外面に2は回転ヘラ切り痕、3は回転糸切り痕が認められる。1～3はすべて渥美・湖西型山茶碗で、1はⅢ期に、2・3はⅡ期にそれぞれ比定される。

4～6は瀬戸美濃窯産の陶器である。4は天目茶碗で、体部の屈曲は明確で、口縁部は外反して端部は尖る。藤澤編年の大窯第1段階に比定される。5は碗で、内面から口縁部外面にかけて灰釉が、それ以外は鉄釉が施される。18世紀中葉に位置づけられる。6は片口である。底部は削出して、外面には灰釉が施される。18世紀中葉に位置づけられる。

7は素焼きの蓋である。上面には指頭圧痕が明瞭に残り、裏面は丁寧にナデられる。2カ所以上で穿孔されている。裏面にはべったりと煤が付着しており、何かをいぶす際に使用したのと思われる。

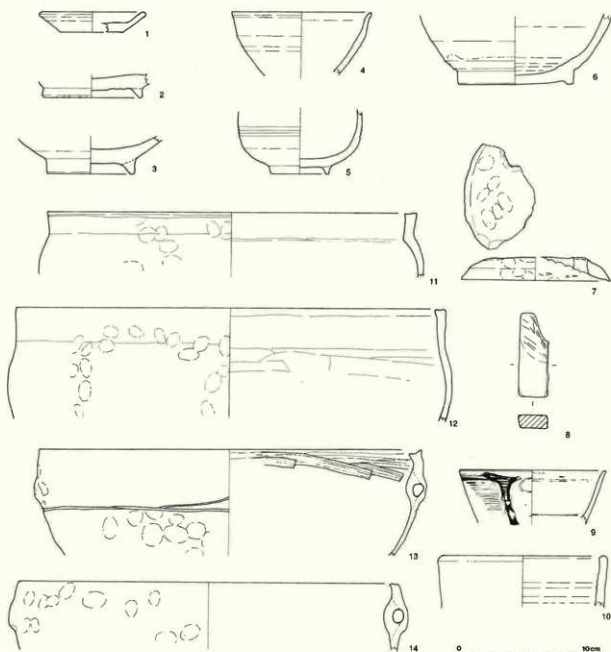
8は砥石である。使用面は1面のみで、微細な擦痕が観察される。石材は凝灰岩である。

9・10は磁器である。9は染付の端反碗。10は青磁の香炉で、口縁部はわずかに肥厚して丸く取める。9は19世紀代のものである。

11～14は土師器の鍋である。11はほぼ直立する短い口縁部を持ち、口縁端部は面を持つ。外面には煤が付着する。12は内湾する口縁部を持ち、口縁部と体部との境界は極めて緩やかである。外面はナデ、内面は板ナデされる。13・14は半球形鍋である。13は口縁部内面にハケ目が施され、そのほかは内外面ともナデ調整である。体部の中位に1条の沈線が巡る。これらは戦国時代～近世のものと言えらるだろう。

**遺構の帰属時期** 出土遺物の時期はおおむね中世前期、中世後期、近世末期に分けることができる。このうち中世前期の遺物はA-2区SD-1やSD-6などにも見られることから混入品と考えるべきだろう。中世後期(戦国期)の遺物には陶器の天目茶碗のほか、土師器の鍋類があり、図化していないものを含めても出土量は比較的多まっている。また近世の遺物は陶器の碗、片口、磁器の碗などがあるが、いずれも18～19世紀に位置づけられるものである。中世後期と近世末期の中間に位置づけられる遺物はほとんどなく、逆に2つの溝の時期をそのまま反映するように思われる。

この仮説が正しいならば、A-2区SD-2は18～19世紀、SD-3は中世後期(戦国期)に属する可能性がある。現状では屋敷地の区画溝と考えるのが妥当だろう。



第29図 A-2区SD-2・3出土遺物実測図 (1/3)

第4表 A-2区SD-2・3出土遺物観察表

( ) の数値は残存値を示す

番号	種類	器種	法量(cm)				残存胎土率%	色調	焼成	調整	備考
			口径	器高	底径	量					
1	中世陶器	小皿	8.0	1.6	4.8		15	密 淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	瀬美・湖西型早期
2	中世陶器	碗	(1.9)	8.0			20	密 淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転へう割り、高台貼付付け・切痕	瀬美・湖西型早期
3	中世陶器	碗	(2.9)	7.0			20	密 淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り、高台貼付	瀬美・湖西型早期
4	陶器	天目茶碗	13.4	(5.0)			5	密 淡灰色	良好	回転ナデ	鉄輪、大塚第1段階
5	陶器	碗		(5.0)			15	密 淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転へう割り、貼付高台	内面・外面上部4枚、下部鉄輪、瀬戸窯跡、18世紀
6	陶器	片口	(5.3)	4.7			15	密 淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転へう割り、側出し高台	鉄輪、美濃窯、18世紀中葉
7	陶器	磁石	11.8	1.8	9.2		25	密 淡橙褐色	良好	ナデ、上面指押さえ、穿孔	使用面のみ
8	石製品	燧石碗	長36.6、幅24.4、厚31.1			35					石材・凝灰岩
9	磁器	香炉	11.6	(4.2)			15	密 白色	良好	回転ナデ、内外面に貝須絵	透明釉、美濃窯、19世紀
10	磁器	鉢	13.2	(4.0)			10	密 淡灰色	良好	回転ナデ	青磁輪
11	土師器	鉢	29.0	(5.0)			10	密 淡褐色	良好	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ナデ・指押さえ	煤付香
12	土師器	鉢	34.0	(8.7)	35.2		10	密 淡褐色	良好	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ・ナデ、外面ナデ・指押さえ	煤付香
13	土師器	鉢	30.0	(8.3)	31.0		10	密 淡褐色	良好	口縁部ヨコナデ、内面・外面ナデ・指押さえ、外面ナデ・指押さえ	煤付香
14	土師器	鉢	30.0	(5.2)	31.6		10	密 淡褐色	良好	口縁部ヨコナデ、内面・外面ナデ・指押さえ	煤付香



## A-2区SD-4 (第5・7・30図)

A・B-2・3区で検出された溝で、A-2区SD-1と重複している。SD-1～3とともに、ほぼ同一場所掘り直された一連の溝の一部である。

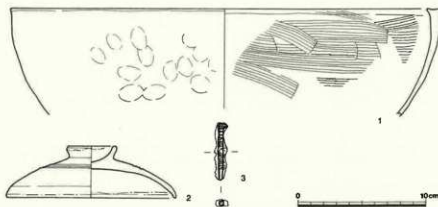
**遺構の状況** (第5・7図) 北東から南西に向かって直線的に延びる溝であり、主軸方位はN-50°-Eで、A-2区SD-1～3とほとんど同じである。調査区外へと延びるため全長は不明で、規模もSD-1に切られているため本来の幅は分からないが、現状では幅1.25m前後である。断面形は浅いU字形で、深さは0.3～0.4mである。また北東端と南西端との高低差は15cmほどあり、南西へ向けて緩やかな下り傾斜となっている。埋土は暗灰色砂質土である。切り合い関係から、A-2区SD-1よりも新しいことが分かる。

**出土遺物** (第30図) 1は土師器の鍋である。半球形を呈し、口縁端部は窪んだ面を成す。内面はハケ目調整、外面はナデ調整され、指頭圧痕が多数見受けられる。

2は陶器の蓋である。高台状を呈した環状のツمامを持ち、内外面には灰釉が施されるが、口縁端部のみ露胎になっている。産地は分からない。

3は鉄製の釘である。上端を折り曲げて頭を作っている。全体に木質が付着し、釘の本体とは直交する方向で木目が通っている。

**遺構の帰属時期** 出土遺物から時期を導くのは困難だが、近世末期を遡ることはあるまい。遺構の切り合い関係から勘案すれば、幕末～近代とすべきだろう。ほかと同様に屋敷地の区画溝と考えるのが妥当であろう。



第30図 A-2区SD-4出土遺物実測図 (1/3)

第5表 A-2区SD-4出土遺物観察表

( ) の数値は残存値を示す

番号	種類	器種	地区名	遺構名	法量 (cm) 口径 器高	残存率%	胎土	色調	焼成	調整	備考
1	土師器	鍋	A-2	SD-4	34.0 (8.4)	10	密	淡茶褐色	良好	口縁部ココナデ、内面板ナデ・ナデ、外面ナデ・指押さえ	窪付着
2	陶器	蓋	A-2	SD-4	13.6 4.0	50	密	淡褐色	良好	回転ナデ、天井部回転ヘラ削り、3条の沈線	灰釉着
3	金属器	釘	A-2	SD-4	長さ4.5						木質付着

## A-2区SD-5 (環壕：第5・7・31~35図)

A-2~4区、B-4区で検出された弥生時代の環壕で、南北に緩やかに蛇行しながら東西に延びている。段丘崖の位置や過去の調査で確認された居住域から、これより南東側が環壕の内側だろう。

**遺構の状況 (第5・7図)** 主軸方位はN-90°-Eである。調査区外へと延びるため全長は不明で、29mほどが検出されたに過ぎない。規模は幅2.0m前後である。断面形は逆台形、または緩やかに傾斜した後、鋭くV字状に掘り下がる「漏斗形」とでも表現すべきものである。深さは最も深いところで1.3m、浅いところで1.0mを測る。環壕の東端と西端で高低差は70cm程度あり、西側への下がり傾斜になっている。

地山が砂礫層であることにも起因するのだろうが、環壕の壁面は凹凸が著しく、非常に粗雑に掘削された印象を受ける。これは同じ地山に掘り込まれた周囲の中世の溝と比較した場合、なおさら感じられる特徴である。このような状況は、環壕の掘削が金属器ではなく、石器を主体にしていたためではないかと考える。

埋土は主に地山質の茶褐色砂質土あるいは暗茶褐色砂質土で、あまり分層できず、流れ込みの方向は判然としない。恐らく環壕の掘削土を利用した土塁が存在したと推定され、これを意図的に崩して一気に環壕を埋め戻したものと考えられる。また底付近からは円礫が多く出土している。

なお、A-3区において土橋状遺構が検出された。地山を削り残すことで環壕の幅を著しく狭めているが、完全に地続きにはならず、50cmほどの切れ目がある。またこの部分では底を山なりに高く築いている。地山を削り残したものではなく、ほかとほぼ同様の深さまで掘削した後に土を盛って形成している。盛土状況(第7図)を見ると、地山質の褐色土と灰色系土を使用して、内側から山成りに積み上げていることが分かる

**遺物の出土状況 (第31~33図)** 当初、A-2区付近から掘削を開始したときは環壕の上層から中世陶器がまとまって出土したため、中世の遺構と考えた。しかしA-3区で完形の壺などがまとまって出土し始めたことから、弥生時代中期後葉の遺構と判断するに至った。

遺物は土橋状遺構を挟んだ東・西側、さらに環壕の東端付近の3ヵ所に集中する。後期の環壕集落においてま見られる環壕内への土器大量廃棄とは異なり、遺物は点々と出土している。

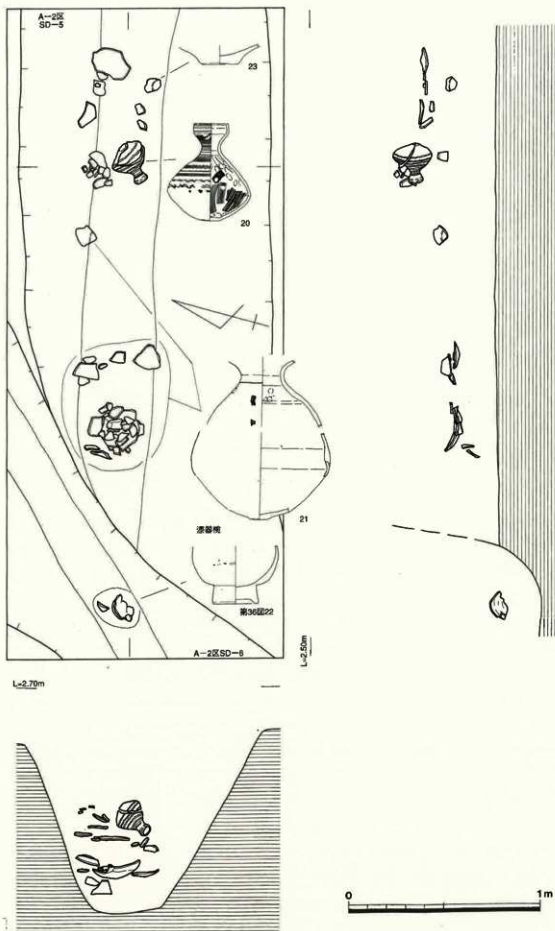
土橋状遺構の西側(第31図)からは、細頸壺(第34図20)が横転して出土したほか、太頸壺(同21)が横転したまま潰れて出土している。いずれも環壕の底から20~30cmほど浮いており、環壕内にある程度土砂が堆積した段階で廃棄されたものである。なお、ここでは東側ほど高く、西側ほど低い位置から遺物が出土しているが、これは土砂の流入状況が反映しているのだろう。

土橋状遺構の東側(第32図)からは、甕の脚部(第35図28)が出土している。やはり環壕の底から10cmほど浮いている。

環壕の東端付近からは、太頸壺(第34図16)や甕の台部(第35図26)などが出土している。遺物の大半は20~30cmほど浮いて出土しているが、一部底に接するようにして出土した土器片があった。ただしいずれも摩滅が著しく、帰属時期を特定できるものではなかった。

なお、以上の土器が環壕外のどの位置から廃棄されたものかは把握できていない。

**出土遺物 (第34・35図)** 前述のように、当遺構の出土遺物は環壕の上層・比較的浅い位置から出



第31图 A-2区SD-5出土状况-1 (1/20)

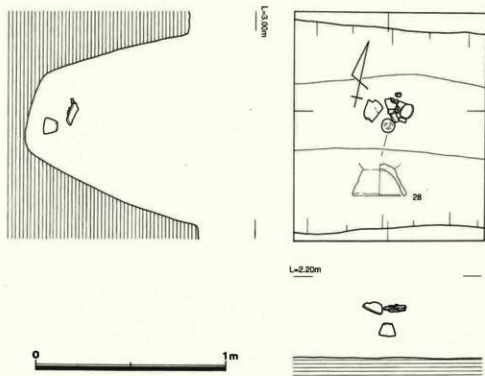
土した中世前期のもの（1～13）と、弥生時代中期後葉のもの（14～28）とに分けられる。

1は灰釉陶器の碗である。底部には回転糸切り痕が見られる。

2～8は中世陶器の碗で、2は体部がゆるやかに外反し、底部には回転糸切り痕が見られる。高台は断面が三角形を呈し、端部には靱痕が認められる。内外面には自然釉が見られる。3にも自然釉が見られる。4～8は底部で、高台は高く、外面には4～6・8に回転糸切り痕が見られ、7も恐らく回転糸切りののちナデしているだろう。いずれも渥美・湖西型山茶碗で、I期に属するものである。9は中世陶器の片口である。内外面に自然釉が見られる。10は中世陶器の鉢で、低い高台が水平方向に付けられている。

11～13は土師器である。11はロクロ成形された皿で、底部には回転糸切り痕が見られる。12は手づくね成形の皿で、外面には指頭圧痕が明瞭に観察される。13はいわゆる清瀬型鍋である。口縁部は外側に折り曲げてヨコナデされる。体部は内面が板ナデ、外面がナデ・指押さえてある。これら土師器は1～10に伴うものであろう。

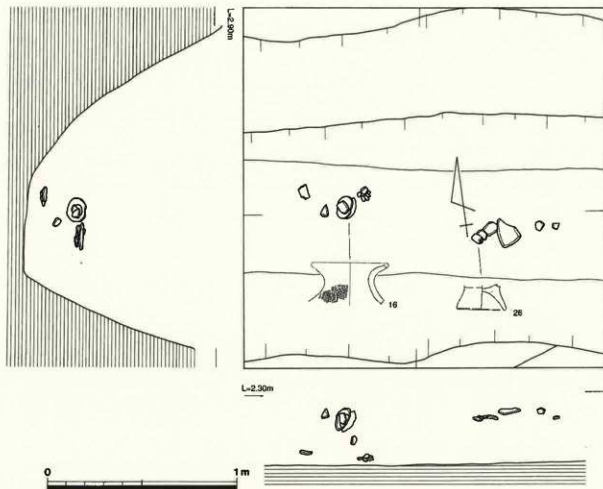
14～28はいずれも弥生時代中期後葉、長床式のものである。14は太頸壺の口縁部で、縁帯の外面には竹管による2重の円形刺突文が、また上面には巻貝による扇状文が見られる。15は壺の口縁部と考えられ、縁帯には3条の凹線が見られる。16は太頸壺の頸部片で、著しく摩滅するが、外面にハケ目が施される。17～19は壺の破片で、17には棒状工具の沈線文とヘラ描斜線文が、18・19にはヘラ描斜格子文と櫛描横線文が見られる。20は細頸壺で、当遺構中唯一完形で出土した。口縁部は袋状を呈し、外面には3条の凹線文がめぐる。体部は算盤玉状を呈し、底部は平坦面を持つ。調整は、内面がナデ・板ナデで、外面は摩滅のためよく分からないが、体部中位にわずかにハケ目が見られる。外面の



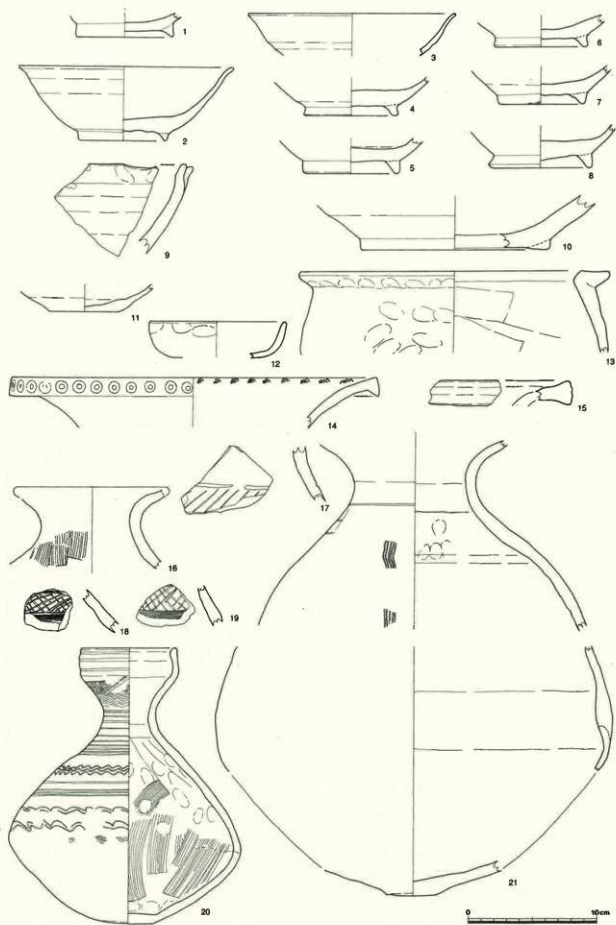
第32図 A-2区SD-5出土状況-2 (1/20)

頸部には櫛描簾状文、粗い櫛描波状文、ヘラ描横線文が、体部には櫛描波状文・横線文が見られる。21は太頸壺で、大型のものである。口縁部～肩部、体部中位、底部のそれぞれの破片を図上で復元している。口縁部は欠損するが肩は緩やかに張り、最大径は体部下位にあると思われる。底部の平坦面は比較的狭い。全体的に摩滅が著しく、調整や文様などに不明な点が多いが、頸部にヘラ状工具による沈線文が1条見られるほか、縦位の櫛描波状文が見られる。22～24は壺の底部である。22は体部が比較的まっすぐに立ち上がる。調整は内面がハケ目、外面がナデである。23は突出した底部を持ち、24は対照的に体部から緩やかに底部に移行する。いずれも摩滅が著しい。25～28は甕の脚部である。25は短く、また外反して接地面に面を持つ。26も短く、ほぼハの字形にまっすぐ広がり、端部はわずかに内湾する。27もハの字形にまっすぐ広がるものである。28は比較的高いもので、内湾して広がり、柱状部は厚い。

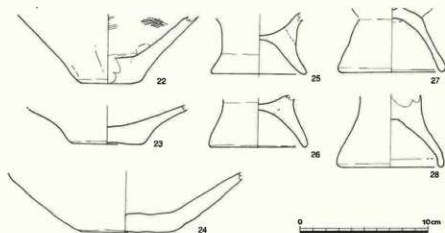
**遺構の帰属時期** 当遺構は弥生時代中期後葉の土器が集中して認められることや、規模・形状などから見て当該期の環濠と評価できるだろう。この場合、比較的まとまって出土した中世前期の遺物の評価が問題になるだろう。恐らく、意図的に埋め戻された環境ではあったが、すべて埋められることなく、一部は窪地となってその後長期に渡り遺存し続けたと思われる。中世前期にそれを何かに再利用した結果、このような遺物出土状況を示すことになったと考える。



第33図 A-2区SD-5出土状況-3 (1/20)



第34図 A-2区SD-5出土遺物実測図-1 (1/3)



第35図 A-2区SD-5出土遺物実測図-2 (1/3)

A-2区SD-6

(第5・7・31・36図)

A・B-2・3区で検出された溝で、またA-2区SD-1~4と平行して検出された。

遺構の状況 (第5・7図) 北東から南西に向かって直線的に延びる溝で、主軸方位はN-46°である。調査区外へ

へと延びるため全長は不明だが、規模は幅1.25~2.5m前後で、一部が南東側に張り出してテラス状を成している。断面形は緩やかに下がった後、急激に落ち込んだ長大な逆台形をしており、深さは約1.5mと幅に比較して著しく深い。また北東端と南西端で高低差は25cm程度あり、南西側が低くなっている。埋土は地山質の褐色砂礫層が主体で、恐らく人為的な埋め戻し土と思われる。一方底近

第6表 A-2区SD-5出土遺物観察表

( ) の数値は残存値を示す

番号	種類	器種	法量(cm)				残存胎土	色調	焼成	調整	備考	
			口径	器高	底径	口径						
1	灰陶器	碗	17.0	(1.8)	7.8		25	密 淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り、高台貼付け		
2	中世陶器	碗	5.8	7.0			50	密 淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り、高台貼付け、粗底	自然釉、西型、洞内型(一)型	
3	中世陶器	碗	16.4	(3.3)			10	密 灰色	良好	回転ナデ	自然釉、西型、洞内型(一)型	
4	中世陶器	碗	(3.0)	7.6			30	密 淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切りのちナデ、高台貼付け	西型、洞内型(一)型	
5	中世陶器	碗	(2.8)	7.8			25	密 淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り、高台貼付け	西型、洞内型(一)型	
6	中世陶器	碗	(2.5)	7.4			15	密 淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り、高台貼付け	西型、洞内型(一)型	
7	中世陶器	碗	(3.0)	6.6			45	密 淡灰色	良好	回転ナデ、高台貼付け、内面に重ね焼き痕	西型、洞内型(一)型	
8	中世陶器	碗	(3.3)	8.2			30	密 淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り、高台貼付け	内面自然釉、西型、洞内型(一)型	
9	中世陶器	片口	(7.0)					密 淡灰色	良好	回転ナデ	口縁部に自然釉	
10	中世陶器	鉢	(4.2)	15.0			5	密 灰色	良好	内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り、高台貼付け	内面に自然釉	
11	土師器	皿	(2.1)	5.6			25	密 淡褐色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	口口成形	
12	土師器	皿	10.9	(2.8)			15	密 淡褐色	良好	ナデ、口縁部に指押さえ	手づくね成形	
13	土師器	湯瓶型	24.6	(6.4)			5	密 褐色	良好	口縁部ヨコナデ、内面板ナデ、外面ナデ、指押さえ		
14	弥生土器	太煎壺	29.4	(3.9)			5	密 淡褐色	良好	口縁部緑帯外面に竹管刺突文、上面に巻貝圓状文、摩滅		
15	弥生土器	壺か	(1.9)					密 淡褐色	良好	内面ヨコナデ、口縁部緑帯に三条の凹線		
16	弥生土器	太煎壺	11.2	(6.2)			10	密 淡褐色	良好	外面ハケ目、摩滅		
17	弥生土器	壺	(4.0)					密 茶褐色	良好	外面に棒状工具による沈痕・ヘラ描斜線文、摩滅		
18	弥生土器	壺	(3.8)					密 淡褐色	良好	ナデ、外面に帯掛横線文・ヘラ描斜線文		
19	弥生土器	壺	(3.3)					密 褐色	良好	ナデ、外面に帯掛横線文・ヘラ描斜線文		
20	弥生土器	細頸壺	7.2	21.7	4.7	4.1	18.2	95	密 淡褐色	良好	内面はナデ器押さえ板ナデ、外面は口縁部割線文、底部に帯掛横線文・波状文、体部にヘラ描横線文・帯掛横線文、ハケ目、全体に摩滅	
21	弥生土器	太煎壺	(35.9)	4.0	9.6	31.4	55	密 淡茶褐色	良好	摩滅	図上復元	
22	弥生土器	壺	(5.4)	5.1			10	密 茶褐色	良好	内面指押さえ・一部ハケ目、外面ナデ、全体に摩滅		
23	弥生土器	壺	(3.0)	6.0			10	密 淡茶褐色	良好	摩滅		
24	弥生土器	壺	(4.8)	8.0			5	密 淡茶褐色	良好	摩滅		
25	弥生土器	甕	(4.8)	7.5			5	密 褐色	良好	内面ナデ・摩滅、外面一部指押さえ	脚部	
26	弥生土器	甕	(7.3)	3.9			5	密 褐色	良好	摩滅	脚部	
27	弥生土器	甕	(4.2)	8.6			5	密 褐色	良好	摩滅	脚部	
28	弥生土器	甕	(5.6)	8.6			5	密 褐色	良好	摩滅	脚部	

くでは暗灰色粘質土と褐色系の砂質土が互層に堆積している。暗灰色粘質土はこの溝が滞水時に自然堆積した泥層と思われ、時おり溝の上から地山質の褐色系砂質土が流入したのだろう。

**遺物の出土状況 (第31図)** A-2区SD-5と交差する地点で、暗灰色粘質土中から漆器碗が出土している。口縁部を上にしており、半分程度しか遺存しない。なお、中世前期の遺物はほとんどが褐色砂礫層から、中世後期の遺物はその下層から出土している。

**出土遺物 (第36図)** 1・2は弥生土器である。1は壺で、外面にはヘラ描斜格子文、櫛描の横線文と縦位の波状文が見られる。2は甕の脚部。3は須恵器の坏身で、7世紀代のものだろう。4~16は中世陶器である。4は碗の口縁部で、緩やかに外反する。5~12は碗の底部で、5・7・12は回転ヘラ切り、そのほかは回転糸切り痕が見られる。12は無高台となる。4~12はいずれも渥美・湖西型山茶碗で、4~11はⅠ~Ⅱ期、12はⅢ期に比定される。13・14は鉢で、13の口縁部内面には1条の沈線がめぐる。15・16は甕で、15の外面には棒状工具を用いて何らかの文様が描かれている。17~22は中世後期の遺物である。17・18は瀬戸美濃窯産陶器で、17は天目茶碗、18は摺鉢。前者は藤澤平年の大窯第1~2段階に、後者は第3段階に比定される。19は籾蓮弁文の青磁碗。20・21は土師器で、20は手づくね成形の皿、21は半球形の鍋である。20は内外面に指頭圧痕が明瞭に残る。22は漆器碗で、体部は深く、底部は著しく厚い。内面には赤漆が、外面には黒漆がそれぞれ塗られ、また外面には赤漆絵がわずかに遺存している。底部の特徴から16世紀代のものであろう。

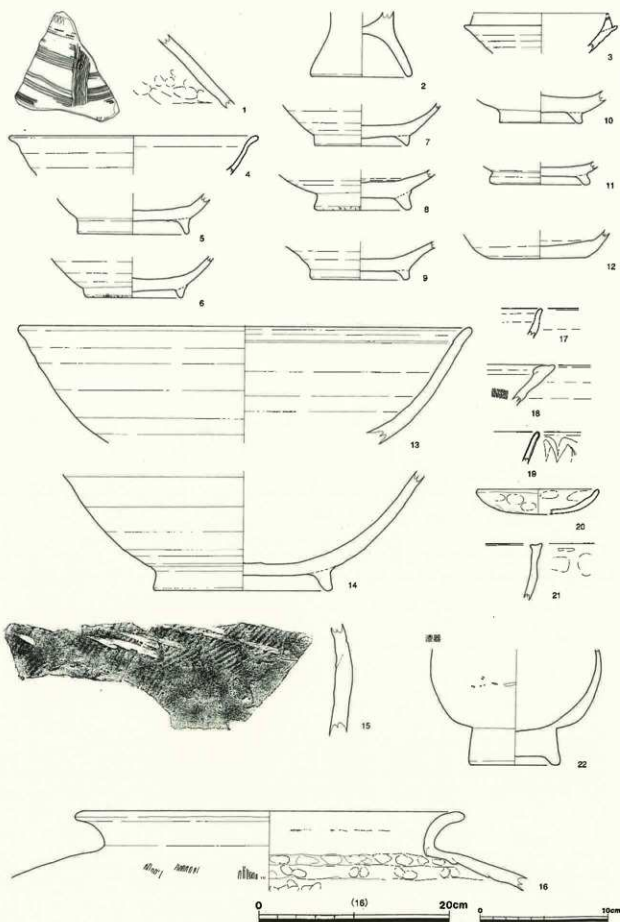
**遺構の層属時期** 主体をなす遺物は中世陶器であるが、漆器碗の層属時期を考えれば、溝の下層からわずかに出土した遺物が本来の時期を示すものだろう。遺構の時期は戦国時代、16世紀代だろう。

第7表 A-2区SD-6出土遺物観察表

( ) の数値は残存値を示す

番号	種類	器種	法量(cm)		残存胎土率(%)	色調	焼成	調整	備考		
			口径	器高							
1	弥生土器	壺	(5.6)		密	暗灰褐色	良好	内面ナデ・指押え、外面ヘラ描斜格子文、櫛描横線文・縦位の波状文			
2	弥生土器	甕	(5.1)	7.6	密	淡茶褐色	良好	摩滅			
3	須恵器	坏身	(2.8)		12.2	密	灰色	良好	回転ナデ		
4	中世陶器	碗	19.4	(3.0)		10	密	淡灰色	良好 回転ナデ	内外面に自然釉、赤漆・褐色土層	
5	中世陶器	碗	(3.1)	8.2	20	密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部ヘラ削りのちナデ、高台貼付け	点の色の中心部から流れる赤漆・褐色土層	
6	中世陶器	碗	(3.3)	7.0	40	密	灰白色	良好	回転ナデ、底部回転ヘラ削りのちナデ、高台貼付け・粉痕	内外面に自然釉、赤漆・褐色土層	
7	中世陶器	碗	(3.3)	7.2	40	密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転ヘラ削りのちナデ、高台貼付け・粉痕	渥美・湖西型Ⅰ期	
8	中世陶器	碗	(3.2)	7.0	50	密	灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り、高台貼付け、粉痕	外面に自然釉、赤漆・褐色土層	
9	中世陶器	碗	(3.0)	7.5	35	密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切りのちナデ、高台貼付け、内面に重焼痕	内面に自然釉、赤漆・褐色土層	
10	中世陶器	碗	(2.5)	8.4	40	密	灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り、高台貼付け	渥美・湖西型Ⅰ期	
11	中世陶器	碗	(1.8)	7.4	30	密	淡褐色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り、高台貼付け	渥美・湖西型Ⅱ期	
12	中世陶器	碗	(2.2)	8.2	40	密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転ヘラ削りのちナデ	渥美・湖西型Ⅰ期	
13	中世陶器	鉢	35.8	(9.1)	40	密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転ヘラ削り、口縁部内面に1条の沈線		
14	中世陶器	鉢	(9.4)	13.8	20	密	淡灰色	良好	内面ナデ、外面回転ナデ、回転ヘラ削り、底部未調整、高台貼付け		
15	中世陶器	甕	(8.8)			密	淡灰色	良好	内面ナデ・指押え、外面タタキ目・棒状工具による沈線	外面に自然釉	
16	中世陶器	甕	39.6	(8.3)	5	密	淡灰色	良好	口縁部回転ナデ、体部内面ナデ・指押え、外面ナデ・タタキ目	口縁部に自然釉	
17	陶器	天目茶碗	(2.3)			密	淡灰褐色	良好	回転ナデ	鉢縁・瀬戸美濃窯産、大窯Ⅰ期~Ⅱ期	
18	陶器	摺鉢	(3.2)			密	淡褐色	良好	回転ナデ	鉢縁・瀬戸美濃窯産、大窯Ⅰ期	
19	磁器	蓮弁文	(2.5)			密	淡灰色	良好	回転ナデ、外面籾蓮弁文	青磁鉢	
20	土師器	皿	9.6	1.9		40	密	淡茶褐色	良好	ナデ、指押え	手づくね皿
21	土師器	鍋	(4.5)			密	淡褐色	良好	口縁部コナデ、内面ナデか、外面ナデ・指押え	煤付	
22	漆器	碗	(9.1)	7.3	60				ロクロ引き	内面赤漆、外面黒漆	





第36图 A-2区SD-6出土遺物実測图 (1/3·1/4)

## B-4区SD-1 (第5・7・37・38図)

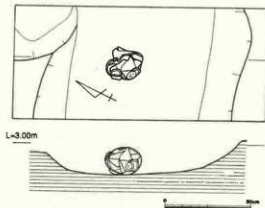
B-4区で検出された溝で、A-2区SD-5(環濠)に接続して途切れている。なお、両者の折り合い関係は不明である。

**遺構の状況**(第5・7図) 北東から南西に向かって延びる溝で、主軸方位はN-58°-Eである。環濠の近くで南へ折れ曲がる。全長は不明だが、規模は幅1.15~1.5m、断面形は浅いU字形で、深さは約0.2mを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。

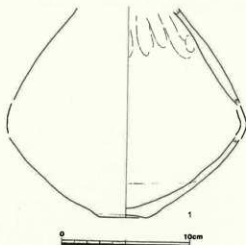
**遺物の出土状況**(第38図) 溝が屈曲する付近から、底部を南東側に向けて、横転したかたちで細頸壺1点が出土している。そのほか遺物はほとんど出土していない。

**出土遺物**(第39図) 1は弥生土器の細頸壺である。体部は算盤玉状を呈し、内外面は著しく摩滅する。

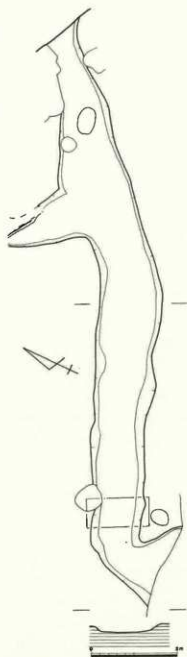
**遺構の帰属時期** 出土した細頸壺のプロポーシオンから見て、弥生時代中期後葉、長床式期とすべきだろう。



第38図 B-4区SD-1出土状況(1/20)



第39図 B-4区SD-1出土遺物実測図(1/3)



第37図 B-4区SD-1(1/80)

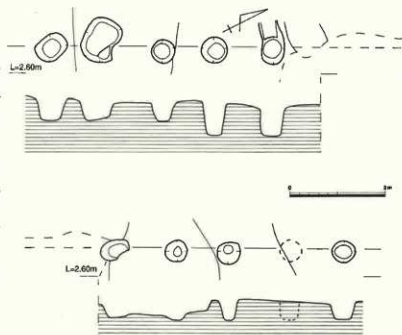
第8表 B-4区SD-1出土遺物観察表

( ) の数値は残存値を示す

番号	種類	器種	地区名	遺構名	器高 (cm)	口径 (cm)	残存率 %	胎土	色調	焼成	調整
1	弥生土器	壺	B-4	SD-1	(16.5)	3.8	30	密	淡茶褐色	良好	内面ナデ、全体に摩滅

## 5. 柵 (第5・40~42図)

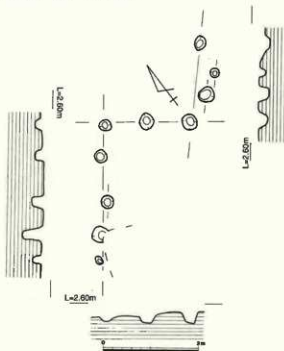
調査区内の西側を中心に、多数のピットが検出された。これらは掘立柱建物の柱穴と考えられるが、建物と把握できたものは少なく、現状では柵3カ所を認定したにとどまる。調査区西側のピット群からはわずかに土師器片などが出土しており、いずれも中世~近世に属すると思われる。



第40図 SA-1 (1/80)

## SA-1 (第40図)

調査区の西端、A・B-1区で検出された8間以上の柵で、途中攪乱を受けて3カ所ほど柱穴が失われており、また1カ所検出されていない部分もあるため、実際は12間以上であったと思われる。直線的に南北に延びるかたちで検出され、主軸方位はN-27°-Eである。南側が調査区外へと延びる可能性があるため本来の全長は不明だが、現状では長さ14.0mを測る。柱間は確認できる限りでは1.1m前後とほぼ一定している。柱穴は平面形がいずれも円形もしくは楕円形を呈し、径45~60cm、深さ40~70cmを測る。遺物は出土していないが、周辺のピットから見て中世~近世のものであろう。性格は不明であるが、比較的長いことから、屋敷地内の区画に利用されたものであろうか。



第41図 SA-2 (1/80)

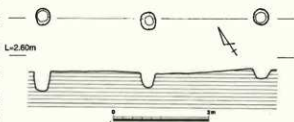
## SA-2 (第41図)

調査区の東端、A-4区で検出された柵で、8カ所の柱穴が鍵の手状に並んでいる。主軸方位はN-43°-Eである。南側の柱穴が一部攪乱によって欠けているが、恐らくほぼ全体が検出されているだろう。全長は5.9mで、柱穴は並びが必ずしも一直線ではなく、部分的なズレが見られる。柱間は確認できる限りでは0.9m前後とほぼ一定している。柱穴は平面形がいずれも円形もしくは楕円形を呈し、径25~35cm、深さ15~40cmを測る。遺物は出土していないが、SZ-10と重複している

ことから、これ以後の遺構と考えられるが、その性格はよく分からない。規模から見て別棟の建物に伴う目隠し屏のもののだろうか。

### SA-3 (第42図)

調査区の東端、B-4区で検出された柵で、3ヵ所の柱穴が直線的に並んでいる。主軸方位はN-54°-Wである。全長は4.6mで、柱間は2.3mである。柱穴は平面形がいずれもほぼ円形を呈し、径30~35cm、深さ20~40cmを測る。遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。その規模から見て恐らく目隠し屏のもののだろう。



第42図 SA-3 (1/80)

## 6. 土壌 (第5・43~58図)

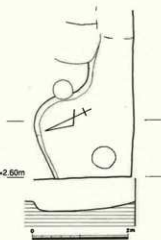
土壌は調査区の全体にわたり、さまざまな形態のものが検出されている。特に調査区の西側から中央にかけて多く分布しているが、その大半は不整形で性格を積極的に把握できるものはほとんど無い。ここでは、時期を判定できる遺物が出土した土壌を中心に説明する。

### A-1区SK-1 (第43図)

**遺構の概要 (第43図)** 調査区の南西端で検出された土壌で、南と西側が調査区外になるため平面形は不明だが、恐らく不整形なものだろう。規模は現状で東西3.0m以上、南北2.1m以上を測り、深さは20cmと比較的浅い。埋土は暗茶褐色砂質土である。

**出土遺物** 弥生土器片があるが、図示可能なものは無い。

**遺構の帰属時期** 土器の特徴から見て、恐らく弥生時代中期後葉であろう。



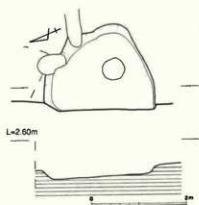
第43図 A-1区SK-1 (1/80)

### A-1区SK-7 (第44・45図)

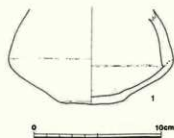
**遺構の概要 (第44図)** 調査区の西端で検出された土壌で、西側が調査区外になるため平面形は不明だが、恐らく円形、あるいは楕円形を呈すると思われる。規模は現状で東西1.6m以上、南北2.3m、深さは20cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。

**出土遺物 (第45図)** 弥生土器の壺が1点のみ出土している。1は口縁部を欠損しているが、体部下位に最大径を持ち、底部は平底で突出しない。内外面ともに摩滅が著しい。

**遺構の帰属時期** 土器のプロポジションから見て、恐らく弥生時代中期後葉・長床式期であろう。



第44図 A-1区SK-7 (1/80)



第45図 A-1区SK-7出土遺物実測図 (1/3)

第9表 A-1区SK-7出土遺物観察表

( ) の数値は残存値を示す

番号	種類	器種	地区名	遺構名	法量 (cm)			残存率 %	胎土	色調	焼成	調整
					器高	底径	最大径					
1	弥生土器	壺	A-1	SK-7	(7.4)	5.0	13.1	25	密	茶褐色	良好	外面ナデ、全体に摩滅

## A-2区SK-5 (第46図)

**遺構の概要 (第46図)** 調査区の南側、SZ-2と重複して検出された土壌である。溝状に北西から南東に向け細長く延び、北西側はA-2区SK-2に切られている。規模は現状で長さ3.4m以上、幅0.8m、深さは20cmを測る。埋土は淡茶褐色砂質土である。

**遺構の所属時期** 弥生土器片が出土しており、恐らく弥生時代中期後葉であろう。遺構の性格は不明である。

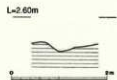


## A-3区SK-1~4 (第47図)

**遺構の概要 (第47図)** 調査区の西側、環濠内から検出された土壌群で、いずれも溝状に細長く延びた形状をしており、同様な性格を持つものと思われる。

A-3区SK-1は北西から南東へ細長く延び、北西側はA-2区SD-5 (環濠) に切られている。切り合い関係から、A-3区SK-1の方が環濠よりも古い。規模は現状で長さ3.2m以上、幅0.65m、深さは15cmを測る。

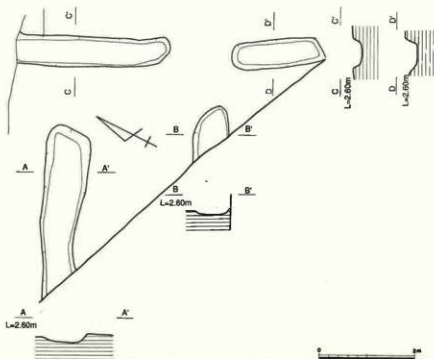
A-3区SK-2はSK-1の延長線上に、北西から南東へ延びている。南東側は調査区内で収束しているようである。規模は現状で長さ2.0m、幅0.6m、深さは25cmを測る。A-3区SK-3は、SK-1・2とほぼ直交する方向、北東から南西へと延び、南西側は調査区外になる。規模は現状で長さ3.6m以上、幅0.8m、深さは15cmを測る。A-3区SK-4は、SK-3に平行して延びる土壌と推定されるが、大半は調査区外となっている。北東から南西へと延びると思われるが、大半は調査区外である。規模は現状で長さ1.2m以上、幅0.8m、深さは10cmを測る。以上の埋土はいずれも暗茶



第46図 A-1区SK-5 (1/80)

褐色砂質土である。その形状から方形周溝墓の周溝と考えられるが、配置からは周溝墓の単位を把握出来ないため、土壇として扱った。

**遺構の帰属時期** 遺物は出土していないが、SK-1が環濠に切られることから、それ以前の遺構と言える。方形周溝墓の周溝と思われること、SK-1・2が方形周溝墓SZ-10の周溝と平行することから、時期は恐らくほかの方形周溝墓群と同様弥生時代中期後葉・古井式期と考えられる。



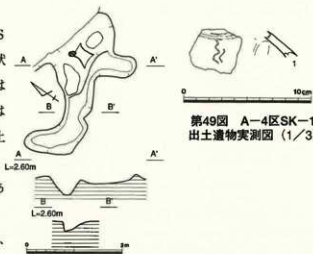
第47図 A-3区SK-1~4 (1/80)

#### A-4区SK-1 (第48・49図)

**遺構の概要 (第48図)** 調査区の東側、SZ-10と重複して検出された土壇である。溝状を呈し、途中に屈曲部や張出部を持つ。北側はA-2区SD-5 (環濠) に切られる。規模は長さ4.0m、幅0.55m、深さは40cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。

**出土遺物 (第49図)** 1は弥生土器の壺片である。櫛描の横線文と縦位の波状文が見られる。

**遺構の帰属時期** 弥生土器片が出土しており、恐らく弥生時代中期後葉であろう。遺構の性格



第49図 A-4区SK-1  
出土遺物実測図 (1/3)

第48図 A-4区SK-1 (1/80)

第10表 A-4区SK-1出土遺物観察表

( ) の数値は残存値を示す

番号	種類	器種	地区名	遺構名	器高 (cm)	胎土	色調	焼成	調整
1	弥生土器	壺	A-4	SK-1	(2.0)	密	暗褐色	良好	内面ナデ・指押さえ、外面櫛描横線文

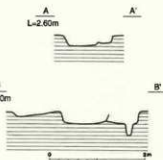
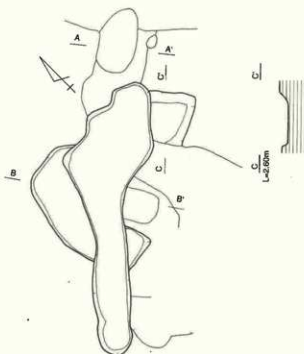
は不明だが、その位置関係からSZ-1の周溝となる可能性もある。

#### B-2区SK-12・15 (第50～52図)

**遺構の概要 (第50図)** 調査区の中央に位置しており、SZ-7の周溝と一部が重複すると考えられる土壌である。調査時には別の遺構として扱ったが、出土遺物を見る限り同一の遺構とすべきであろう。溝状を呈し、規模は長さ5.7m、深さは20cmを測る。埋土は黒褐色砂質土である。

**出土遺物 (第51・52図)** 第51図1は弥生土器の高坏の脚で、脚部は緩やかに内湾し、側面には円形の透かしが見られる。2は弥生土器の甕で、これも口縁部は緩やかに内湾する。第52図3も円形透かしを持った弥生時代の高坏である。脚部は直線的に延びたのち、内湾すると思われる。

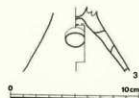
**遺構の所属時期** 出土遺物から、恐らく弥生時代後期・欠山式期と考えられる。調査区内では当該期の唯一の遺構で、弥生時代中期後葉以降も集落が細々と継続していたことを示している。ただし、その性格は不明である。



第50図 B-2区SK-12・15 (1/80)



第51図 B-2区SK-12出土遺物実測図 (1/3)



第52図 B-2区SK-15出土遺物実測図 (1/3)

第11表 B-2区SK-12・15出土遺物観察表

( ) の数値は残存値を示す

番号	種類	器種	地区名	遺構名	法量 (cm)			残存率 %	胎土	色調	焼成	調整	備考
					口径	器高	接合部径						
1	弥生土器	高坏	B-2	SK-12	(4.8)		3.2	5	密	淡褐色	良好	円形透孔、摩滅	欠山式
2	弥生土器	甕	B-2	SK-12	16.1	(6.2)		5	密	淡茶褐色	良好	摩滅	
3	弥生土器	高坏	B-2	SK-15	(5.1)			5	密	橙褐色	良好	円形透孔、摩滅	欠山式

#### B-2区SK-17 (第53・54図)

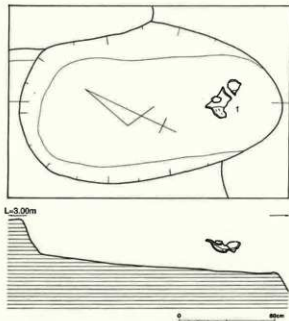
**遺構の概要** 調査区の中央で、B-2区SK-16と重複して検出された土壌である。平面形は現状で長楕円形を呈し、南東側はA-2区SD-4に切られている。規模は長さ1.4m以上、幅0.8m、深

さは30cmを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。

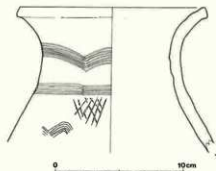
**遺物の出土状況** (第53図) 南東端から弥生土器の太頸壺の口縁部が、口を北側に向けて底から10cmほど浮いて出土している。そのほかの破片は出土していない。

**出土遺物** (第54図1) 1は弥生土器の太頸壺の口縁部である。櫛描の連弧文、横線文、波状文、ヘラ描斜格子文が見られる。

**遺構の帰属時期** 出土した太頸壺の特徴から、弥生時代中期後葉・古井式期と考えられる。



第53図 B-2区SK-17出土状況 (1/20)



第54図 B-2区SK-17出土遺物実測図 (1/3)

第12表 B-2区SK-17出土遺物観察表

( ) の数値は残存値を示す

番号	種類	器種	地区名	遺構名	法量(cm)		残存率 %	胎土	色調	焼成	調整
					口径	器高					
1	弥生土器	壺	B-2	SK-17	14.6	(11.3)	10	密	茶褐色	良好	外面に櫛描の連弧文・横線文・波状文、ヘラ描の斜格子文、全体に摩滅

B-3区SK-10 (第55～57図)

**遺構の概要** (第55図) 調査区の中央で検出された土壌で、西側はA-2区SD-2・3、東側は同SD-6に切られている。規模は幅1.45m、深さは15cmを測り、埋土は暗茶褐色砂質土である。

**遺物の出土状況** (第56図) 円礫に混じって弥生土器の壺が、底から10cmほど浮いて出土した。

**出土遺物** (第57図) 1は弥生土器の壺である。外面には櫛描連弧文が見られる。

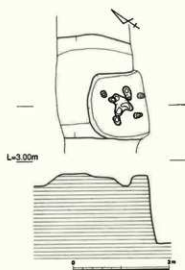
**遺構の帰属時期** 出土した壺の特徴から、弥生時代中期後葉・古井式期と考えられる。

第13表 B-3区SK-10出土遺物観察表

( ) の数値は残存値を示す

番号	種類	器種	地区名	遺構名	器高 (cm)	胎土	色調	焼成	調整



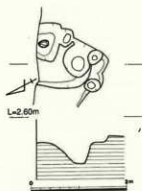


第55図 B-3区SK-10 (1/80)

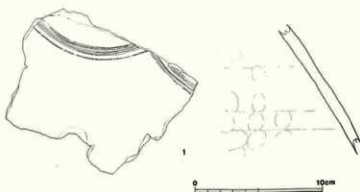
B-4区SK-8 (第58図)

**遺構の概要 (第58図)** 調査区の東側で検出された土坑で、西側はB-4区SD-1に切られている。平面形は不整形で、時期不明の柱穴などが重複している。規模は東西1.9m、南北1.5m、深さは15cmをそれぞれ測り、埋土は暗茶褐色砂質土である。大きさ20cmほどの、被熱した円礫が1点だけ出土している。

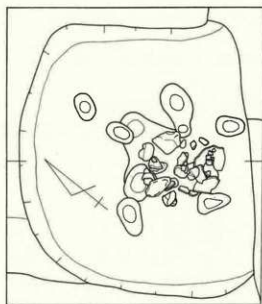
**遺構の所属時期** 弥生土器の破片が出土しているが、図示しうるものはなかった。土器の特徴から見て、恐らく弥生時代中期後葉と考えられるが、その性格は不明である。



第58図 B-4区SK-8 (1/80)



第56図 B-3区SK-10出土遺物実測図 (1/3)



第57図 B-3区SK-10出土状況 (1/20)

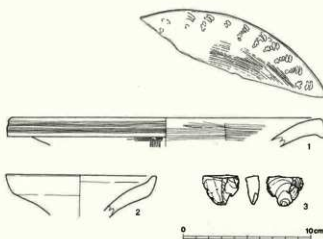


第57図 B-3区SK-10出土状況 (1/20)

## 7. 表土出土遺物 (第59図)

重機による表土除去、あるいは人力での遺構検出作業中に、遺物が若干出土している。このうち主なものを以下に示す。

1は弥生土器の太頸壺の口縁部で、B-1区から出土した。口縁端部は縁帯をなし、外面には凹線文が、内面には巻貝による扇状文が見られる。長床式のものである。2は弥生土器の細頸壺で、B-1区から出土した。受口状口縁を持ち、端部は丸く収める。長床式のものであろう。3は黒曜石の剥片石器である。一端にわずかに使用痕が認められる。



第59図 表土出土遺物実測図 (1/3)

第14表 表土出土遺物観察表

( ) の数値は残存値を示す

番号	種類	器種	地区名	法量(cm)		残存率%	胎土	色調	焼成	調整	備考
				口径	器高						
1	弥生土器	壺	B-3	24.5	(2.2)	5	密	淡褐色	良好	内面ハケ目、口縁部貝殻刺突紋・ナデ・摩滅、外面ヨコハケ・タテハケ・摩滅	
2	弥生土器	壺	A-1	12.0	(3.1)	5	密	淡褐色	良好	ナデ、摩滅	
3	石製品	剥片石器	A-1	長さ2.3、幅2.8、厚さ1.0							黒曜石

## 参考文献

- 鈴木正貴 1992 「第3節 清須城下町から出土した漆器」『朝日西遺跡』  
(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 中野晴久 1994 「生産地における編年について」『中世常滑窯をおって』資料集  
知多半島総合研究所
- 贊 元洋 1995 「長床様式の構造」『三河考古』第8号 三河考古刊行会
- 久永春男 1966 「三 東海」『日本の考古学Ⅲ 弥生時代』河出書房新社
- 藤澤良祐 1989 「本業焼の研究(3)」『研究紀要』Ⅷ 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1991 「瀬戸美濃系大窯製品の流通」『瀬戸市史』陶磁篇4 瀬戸市
- 藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター

## 第4章 まとめ

### 1. 調査区における遺構の変遷 (第60図)

今回の調査区からは弥生時代中期後葉を中心に、戦国時代・江戸時代の遺構が確認されている。また遺物だけを見れば条痕文土器の壺を最古とし、弥生時代後期・欠山式期の土器や古墳時代後期・奈良時代の須恵器、平安時代末の中世陶器なども出土しており、橋良遺跡全域を対象としたならば、さらに広範な時期の遺構が確認される可能性がある。今回の調査区の場合、湿美・湖西型山茶碗のⅠ・Ⅱ期の資料がまとまって出土しているが、これを伴う遺構の内容が不明瞭な点は惜しまれる。

遺物が出土した遺構を抽出し、時期別に並べたものが第60図である。ここでは調査地内の遺構をⅠ～Ⅳの大きく4期に分け、その変遷を説明する。ちなみに、Ⅰ期：弥生時代中期後半A（古井式）、Ⅱ期：弥生時代中期後半B（長床式）、Ⅲ期：戦国時代、Ⅳ期：江戸時代である。

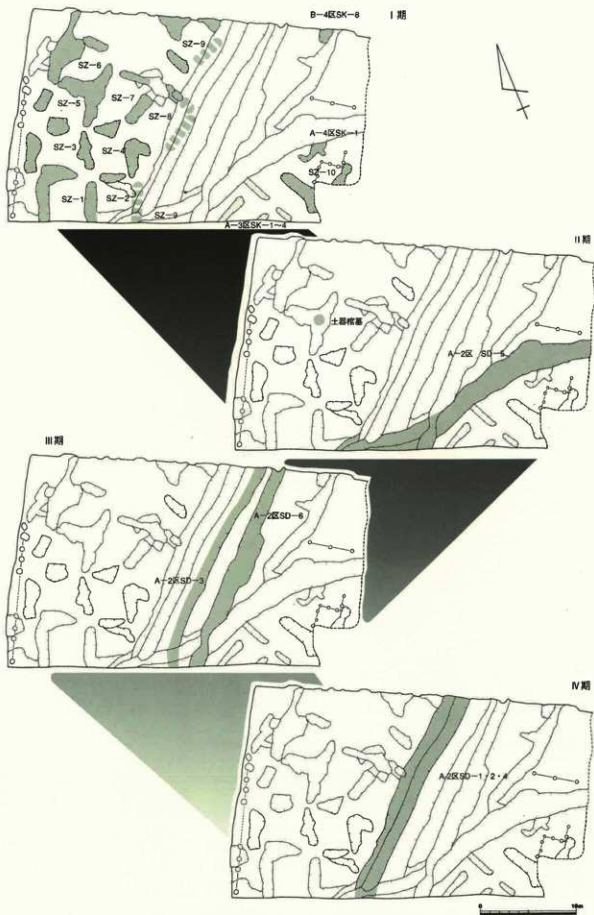
**Ⅰ期** 調査地の恐らく全域に方形周溝墓群が展開する。現状で10基が確認され、周溝を共有しつつ、密集するタイプのものが主体となる。遺構にはSZ-1～10があるほか、A-4区SK-1やB-4区SK-8がある。出土土器はすべて古井式に位置づけられるもので、また一部の遺構は後出する環濠（A-2区SD-5）に切られており、遺構の切り合い関係と土器型式が対応している。

**Ⅱ期** 調査区の南東側に、東西に延びるかたちで環濠（A-2区SK-5）が築かれた。ごく一部しか検出されていないため性格に不明な点が多いが、段丘崖との関係から、環濠の内部はその南東側と思われる。この環濠には土橋状の遺構が伴っている。また方形周溝墓群が群在するところに、周溝がある程度埋没してから、土器棺が1基設けられた。以上からの出土土器はすべて長床式に位置づけられるものである。

ここで注意されるのは、方形周溝墓の形成後、あまり時を経ずして環濠が掘削された点である。調査区内で検出された方形周溝墓群は概して規模が小さく、盛土量もあまり多くないと思われるが、短期間にその存在を忘れ去られるほどの施設ではあるまい。現に方形周溝墓と重複して土器棺が設けられたのは、付近がなお墓域として認識され続けていた傍証とも言えるだろう。そうした場所を切るようにして環濠を設けたのは、軍事的緊張の高まりが招いたものだったのだろうか。

**Ⅲ期** 性格不明の溝A-2区SD-6が掘削されたほか、A-2区SD-3もこの時期に属する可能性がある。SD-6は幅1.25mに対して深さが1.5mと著しく深く、また意図的に埋め戻されている。底付近の粘質土から漆器椀が出土している。SD-3は屋敷地の区画溝と考えられるごく浅い溝である。両者の主軸方位はほぼ一致するが、同時存在したものであろうかは分からない。

**Ⅳ期** 調査区の中央に、屋敷地の区画溝と推定される溝A-2区SD-1・2・4が設けられる。このうちSD-1は規模が大きく、円礫で埋め戻されている。このほか調査区の西側を中心に多数検出された柱穴は、図示可能な遺物が出土していないものの、埋土の状況やわずかに出土した遺物片から見て、恐らくⅢ～Ⅳ期に設けられたものだろう。



第60図 調査区遺構変遷図 (1/800)

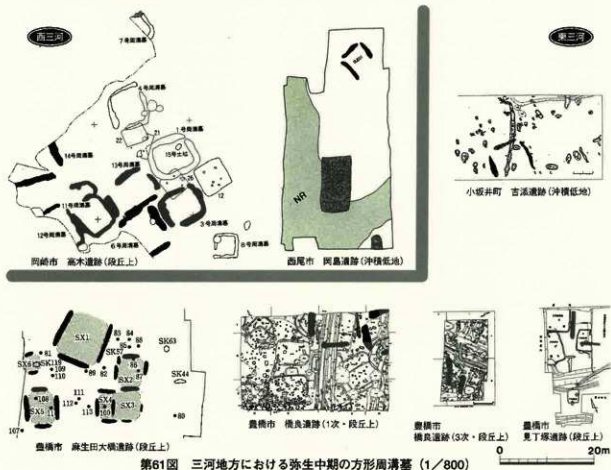
## 2. まとめ (第61・62図)

今回の発掘調査で、橋良遺跡は弥生時代中期と中世前期を主体とする集落遺跡であることが改めて確認された。過去の発掘調査においてもこの点是指摘されてきたところであるが、今回の調査のポイントは①方形周溝墓群、②弥生時代中期の環濠、③中世前期の様相の3点に集約されるだろう。

①は、大半が周溝を共有化しつつ展開した小規模なもので、いずれも周溝の四隅が切れた形態をしている。単体としては、三河地方で確認されている弥生時代中期の方形周溝墓(第61図)の一般的な形態といえよう。また群集形態のあり方は、東海地方で見られる状況と大きく違うことはない。むしろ今まで弥生時代中期の墓域の検出例が乏しい三河地方において、こうしたあり方が確認されたことは、確認例に恵まれている尾張地方や遠江地方との間をつなぐ事例として注意される。

また②は、その明らかな例として三河地方で初めて検出されたものである。弥生時代の多くの環濠に見られる形態とはやや異なり、断面形は漏斗状を呈する部分が見られ、出入口と思われる土橋状の遺構も確認されている。底付近から出土した土器はいずれも弥生時代中期の長床式期に比定されるものである。また埋土の状況から見て、短期間のうちに(恐らく弥生時代後期には)人為的に埋め戻されている。

この場合興味深いのは、環濠が古井式期の墓域を分断して設けられたことである。その間の年代差を考慮しても、環濠の掘削時に方形周溝墓の存在がすでに忘れられていたとは考えがたい。当時の墓に対する観念を反映するとも思われるが、環濠が必要とされた背景も重要であろう。ちなみに環濠



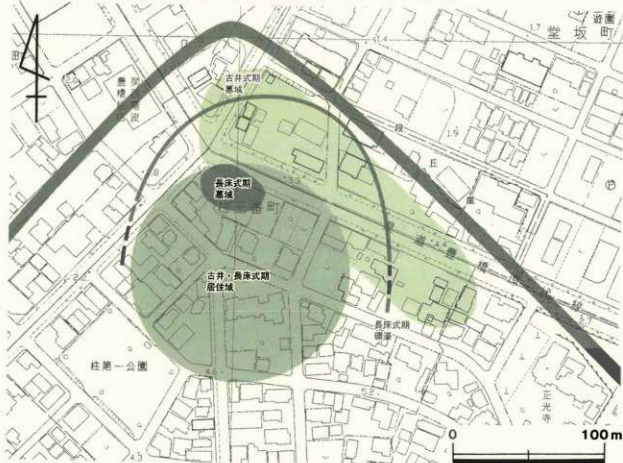
第61図 三河地方における弥生中期の方形周溝墓 (1/800)

については、緊急時の集落防御に対処するためとの考えがある一方で、近年は集落成員の結合を維持するために具現化されたもの、との評価もある。

ところで、過去の発掘調査成果を含め、橋良遺跡における弥生時代中期の遺構群をおおむね a、古井式期の墓域、b、同期の居住域、c、長床式期の墓域、d、同期の居住域、e、同期の環濠に分けることができる。これらは遺跡の所在する低位段丘の北側に集中しており、段丘の端部に a が、その南側の内陸に b・d・e が分布していると現段階では推定できる（第62図）。長床式期の墓域は、同期の環濠内に位置する形になるが、こうした環濠内に居住域と墓域が含まれる例は極めて乏しい。土器型式上からはほぼ同時期としか指摘できないため、今後の詳細な検討が必要とされる部分である。

橋良遺跡の変遷過程は、弥生時代中期前葉に集落形成が始まり、中期後葉に盛期を迎え、中期後葉でも新しい段階で環濠を掘削してムラの「囲郭化」を図った後、恐らく弥生時代後期には環濠が埋め戻され、集落自体は何らかの要因によって急速に衰退したと現段階では指摘できる。豊橋市の海浜部における弥生時代中期の拠点集落として、その動向の把握は今後も注意されねばならない。

最後に、中世前期の状況について触れたい。今回の調査では遺構こそ確認できなかったものの、渥美・湖西型山茶碗の4・5期に比定される資料が多く出土した点は特筆される。12世紀初頭の文献に現れ、恐らく中世前期に渡って存続したであろう伊勢神宮領「橋良御厨」との时期的な齟齬は無く、周辺でも当該期の遺物は橋良遺跡に濃密に分布することから見て、ここがその比定地とされることはほぼ問題が無いように思われる。橋良遺跡の西～北～東にかけて所在する沖積低地のあり方も含め、今後橋良御厨の構造把握を意識した調査の進展が求められてくるだろう。



第62図 橋良遺跡の構造（暫定案）

## 橋良遺跡採集資料の紹介 (第62・63図)

ここで紹介する資料は、市内在住の小畑頼孝氏が昭和49年10～11月にかけて、橋良遺跡内で行われた工事に際して採集したものである。おおむね2カ所から採集され、便宜的にそれぞれをA・B地点と名付けている。A地点は現在の柱第一公園の北側、B地点は現在の柱三番町交差点から県道豊橋環状線を、愛知大学方面へ100mほど進んだあたりである。

A地点出土遺物は中世陶器が主体を占める。1は上師器の不明品の口縁部である。2は中世陶器の小皿、3・4は同碗で、いずれも深美・湖西型山茶碗である。5は瀬戸美濃窯産陶器の丸碗。

B地点出土土器は弥生時代中期後葉の土器が主体を占める。6～13は壺類で、6・7は受口状口縁となり、6は口縁端部にヘラによる刻み目、7は外面に凹線文が見られる。8は口縁端部に面を持つほか、外面には棒状工具による沈線が1条認められる。9～13は太頸壺である。9は口縁端部に面を持ち、頸部には断面三角形の低い突帯がめぐる。10は縁帯を持ち、口縁部の内面には櫛指扇状文や貼付珠文が見られる。11は口縁端部に棒状工具による部分刻み目が、また外面には棒状工具による斜位→横位の沈線文が見られる。12にも口縁端部に棒状工具による部分刻み目が見られる。13は口縁端部にわずかに面を持ち、ヘラによる刻み目が施される。また外面は板ナデされる。

14～16は高環で、14・15には外面に凹線文が見られる。16は内部が中空である。

17～27は甕である。17は口縁端部に面を持ち、棒状工具による刻み目が見られる。内外面はハケ目調整される。18・19も口縁端部に面を持ち、19は体部外面にハケ目が見られる。20は口縁端部を丸く収め、頸部の屈曲は緩やかで、体部外面には縦方向にハケ目が見られる。21・22は口縁端部に面を持ち、21は櫛による刻み目が、22はヘラによる刻み目が見られる。体部外面はハケ目調整である。23・24も体部外面にはハケ目が見られる。25～27は甕の脚部である。25は丈が低く、ハの字状にまっすぐに延びる。端部は面を持つようである。26・27は人型の脚部で端部を内側にわずかに張り出させる。外面にはハケ目が見られる。

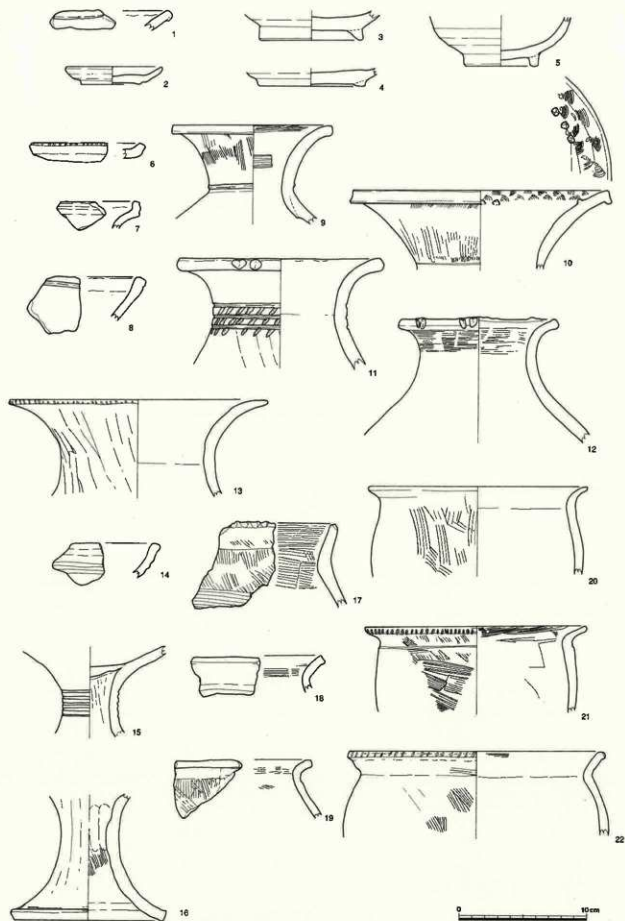
28～38は採集地点不明のものである。28は中世陶器の小皿で、深美・湖西型山茶碗のⅢ期に属す。29～34は壺である。29・30は太頸壺で、29は口縁端部には棒状(板状?)工具による刻み目が施され、頸部外面には櫛指の粗い横線文が見られる。30は外面が板ナデされ、粗い櫛指の連気文や縦位の波状文が見られる。31は細頸壺で、受口状口縁を呈する。32は肩付近の破片と思われ、外面には櫛指横線文と波状文が見られる。33は体部の破片で、棒状工具の連続刺突とヘラ描の山形文が見られる。34は体部が球形で、外面は横方向のヘラミガキのち、櫛指横線文、波状文、扇状文が施される。

35・36は甕の脚部である。いずれも極めて丈が低く、接地部は面を持つ。

37は柱状脚の高環で、内部は中実となる。脚端部は縁帯状になる。

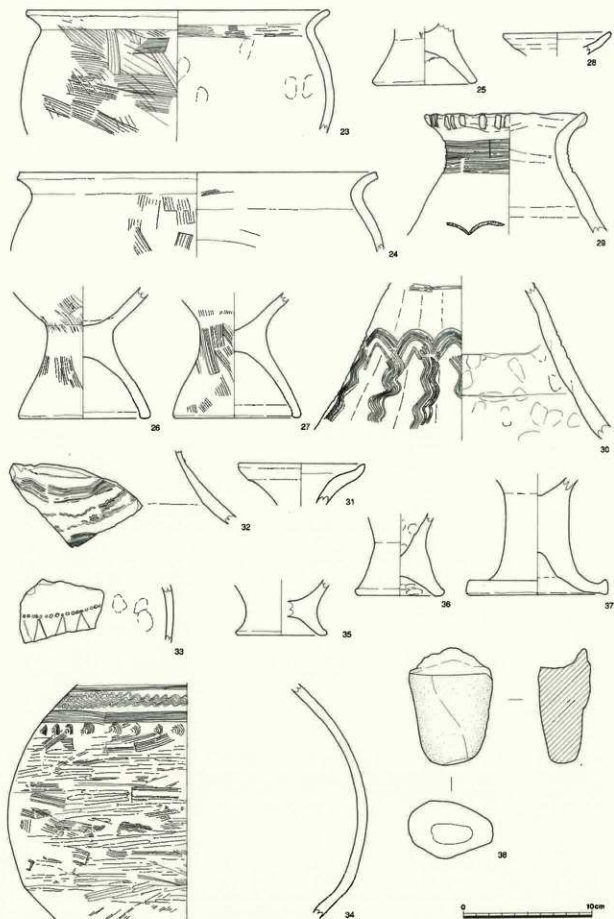
38は敲石で、先端は使用されて潰れている。石材は変成花崗岩である。

ここで紹介した弥生土器は、ほとんどが古井・長床式に比定されるが、34のみ弥生時代後期・欠山式の加筋壺である。B地点は第1～3次調査区の隣接地であり、その内容は各調査と大きく異なるものではない。



第63図 横良遺跡採集資料-1 (1/3)





第64図 橋良遺跡採集資料-2 (1/3)

第15表 橋良遺跡採集遺物観察表

番号	種類	器種	地区名	法量(cm)			残存率%	胎土	色調	焼成	調整	備考	
				口径	器高	底径							
1	土師器	不明品	A地点	(1.5)				密	淡茶褐色	良好	ナデ、摩滅		
2	土師器	小皿	A地点	7.5	1.4	4.5	65	密	淡茶褐色	やや粗	回転ナデ、底部回転糸切り	中世陶器の小皿に似る	
3	中世陶器	碗	A地点	(2.3)	8.0		40	密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転へう切り、高台貼付け、野底	瀬美・瀬西型Ⅰ～Ⅱ期	
4	中世陶器	碗	A地点	(1.4)	8.5		30	密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転へう切り、高台貼付け	瀬美・瀬西型Ⅱ期	
5	陶器	丸瓶	A地点	(3.9)	5.3		30	密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転へう削り、貼付け高台	内外面に鉄粒	
6	弥生土器	壺	B地点	(1.2)				密	淡褐色	良好	ココナデ、口縁部端部にへらの刻み目		
7	弥生土器	壺	B地点	(2.2)				密	淡褐色	良好	ナデ、外面に凹線文		
8	弥生土器	壺	B地点	(3.7)				密	淡茶褐色	良好	外面に1条の沈線、摩滅		
9	弥生土器	太頸壺	B地点	12.4	(7.7)			5	密	淡茶褐色	良好	内面ハケ目・ナデ、外面口縁部縁帯ココナデ、 ほかハケ目・摩滅	頸部に断面三角形の突帯
10	弥生土器	太頸壺	B地点	20.1	(6.2)			5	密	淡褐色	良好	内面板ナデ、欄描縦線文・貼付け珠文、外面ハケ目のちみガキ	
11	弥生土器	太頸壺	B地点	15.8	(8.6)	11.0		10	密	橙褐色	良好	内面摩滅、外面は口縁部に棒状工具の部分刻み目、頸部に棒状工具による斜位→横位の沈線文、体部はハケ目か	
12	弥生土器	太頸壺	B地点	11.9	(9.9)			5	密	淡茶褐色	良好	内面ハケ目・摩滅、外面は口縁部に棒状工具の部分刻み目(2か所1本)、体部は板ナデ	刻み目の数と位置は推定
13	弥生土器	太頸壺	B地点	20.3	(7.7)			10	密	淡茶褐色	良好	内面ナデ・摩滅、外面は口縁端部にへらの刻み目、体部は板ナデ	
14	弥生土器	高坏	B地点	(2.7)				密	暗褐色	良好	外面に二条の凹線、全体に摩滅		
15	弥生土器	高坏	B地点	(6.2)				10	密	淡褐色	良好	内面摩滅、外面ナデ、脚部に凹線文	
16	弥生土器	高坏	B地点	(10.0)	11.9			20	密	淡褐色	良好	内面ナデ、外面脚部ココナデ、全体に摩滅	
17	弥生土器	甕	B地点	(6.6)				密	淡茶褐色	良好	内外面ともハケ目・ナデ、口縁部に棒状工具の刻み目		
18	弥生土器	甕	B地点	(2.8)				密	淡褐色	良好	内面ハケ目、全体に摩滅		
19	弥生土器	甕	B地点	(4.7)				密	淡褐色	良好	内面ハケ目・摩滅、外面口縁部ココナデ、体部ハケ目		
20	弥生土器	甕	B地点	17.1	(6.9)			5	密	淡褐色	良好	外面ハケ目、全体に摩滅	
21	弥生土器	甕	B地点	17.3	(6.8)			5	密	淡茶褐色	良好	内面ハケ目・板ナデ、外面は口縁部に欄の刻み目、頸部に1条の沈線、体部にハケ目	
22	弥生土器	甕	B地点	20.0	(6.7)			5	密	淡褐色	良好	内面摩滅、外面は口縁部へらの刻み目、体部ハケ目	
23	弥生土器	甕	B地点	23.7	(9.6)			5	密	淡褐色	良好	内面ハケ目・指押さえ・ナデ、外面体部ハケ目(細かなハケ目のちねいハケ目)、全体に摩滅	
24	弥生土器	甕	B地点	28.2	(6.2)			5	密	淡褐色	良好	内面板ナデ・摩滅、外面ハケ目・摩滅	
25	弥生土器	甕	B地点	(4.3)	7.6			5	密	淡茶褐色	良好	内面ナデ、外面ハケ目・ナデ	
26	弥生土器	甕	B地点	(10.3)	10.2			5	密	淡褐色	良好	内面は体部摩滅、台部ナデ、外面はハケ目・摩滅	
27	弥生土器	甕	B地点	(9.7)	9.8			10	密	橙褐色	良好	内面摩滅、外面ハケ目・摩滅	
28	中世陶器	小皿	その他	8.6	(1.7)			25	密	淡灰色	良好	回転ナデ	瀬美・瀬西型Ⅱ期
29	弥生土器	太頸壺	その他	12.9	(9.4)			5	密	淡茶褐色	良好	内面板ナデ・ナデ、外面は口縁部に断面方形の棒状工具による部分刻み目(3か所1組)、 頸部に粗い欄描縦線文、体部に逆弧文	
30	弥生土器	太頸壺	その他	(11.4)				15	密	淡褐色	良好	内面ナデ・指押さえ、外面粗い欄描縦線文・逆弧文・縦位の波状文	
31	弥生土器	細頸壺	その他	10.0	(3.3)			5	密	淡茶褐色	良好	口縁部ココナデ、外面ナデ、全体に摩滅	
32	弥生土器	壺	その他	(5.9)				密	淡褐色	良好	内面摩滅、外面ナデ、欄描縦線文・波状文		
33	弥生土器	壺	その他	4.8				密	淡灰色	良好	内面ナデ・指押さえ、外面ナデ、棒状工具の連続刺突へう描逆弧文		
34	弥生土器	壺	その他	(18.4)				20	密	淡褐色	良好	内面摩滅、外面ハケ目のちみガキ、欄描縦線文・波状文・扇状文	
35	弥生土器	壺	その他	(4.4)	7.1			5	密	橙褐色	良好	摩滅、外面ナデ	
36	弥生土器	壺	その他	(6.5)	6.7			5	密	淡褐色	良好	内面ナデ・指押さえ、外面ナデ・摩滅	
37	弥生土器	高坏	その他	(9.2)	11.0			10	密	淡褐色	良好	内外面とも摩滅	外面に朱
38	石製品	巖石	その他	長さ9.2、幅最大6.5、厚さ4.1								石材・変成花崗岩	

# 報 告 書 抄 録

ふりがな		はしらいせき(3)						
書名		橋良遺跡(Ⅲ)						
副書名								
巻次								
シリーズ名		豊橋市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号		第62集						
編著者名		岩原 剛						
編集機関		豊橋市教育委員会						
所在地		〒440-0801 愛知県豊橋市今橋町3-1 TEL0532-51-2879						
発行年		西暦2002年3月29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃〃	東経 〃〃〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はしらいせき 橋良遺跡	とよはしし 豊橋市 はしらいせき 柱三番町 115・116・117 の一部	23201	79469	34度 44分 45秒	137度 22分 50秒	20010404～ 20010531	1,090	土地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
橋良遺跡	集落	弥生時代 平安～鎌倉時代 戦国時代 江戸時代	方形周溝墓10基以上、環壕、土城  溝  溝	弥生土器、石器  中世陶器、青磁など  漆器椀、陶器など  陶器、鉄製品など		弥生時代中期後葉に営まれた集落。連接型の方形周溝墓群と環壕を確認。		

# 写真図版



調査区全景（上から）

カラー図版 2



1. 調査区全景 (北東から)



2. 方形周溝墓群 (南西から)



1. A-1区 SD-1 (SZ-1) 出土状況 (東から)



2. 土器棺墓出土状況 (南から)

カラー図版 4



1. A-2区SD-5・6 (南西から)



2. A-2区SD-5出土状況-1 (南西から)





1. A-2区SD-5出土状況-2 (東から)



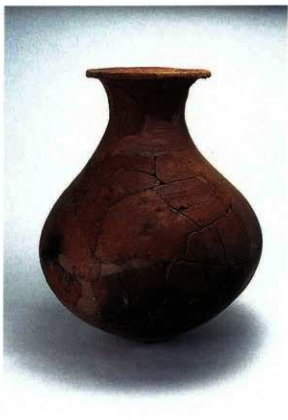
2. A-2区SD-6漆器碗出土状況 (南から)



1. A-2区SD-5出土遺物



2. 方形周溝墓出土遺物



3. 土器棺



調査区全景（上から）

写真図版 2



1. 調査区全景-2 (東から)



2. 調査区全景-3 (北東から)



1. 方形周溝墓群 (南西から)



2. 土器棺墓出土状況 (西から)

写真図版 4



1. A-1区SD-1出土状況（南東から）



2. A-2区SK-1出土状況-1（北から）



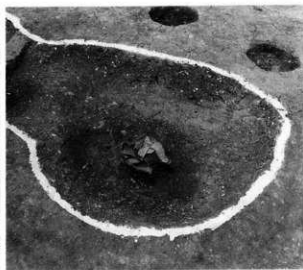
3. B-1区SK-43出土状況（東から）



4. A-2区SK-1出土状況-2（南から）



5. B-2区SK-5出土状況（南から）



6. A-4区SK-13出土状況（東から）



1



21



14



24



16



25



17



土器箱・5

写真図版 6



1. A-2区SD-1~5土層 (北から)



2. A-2区SD-1土層 (南から)



3. A-2区SD-5土層 (南西から)

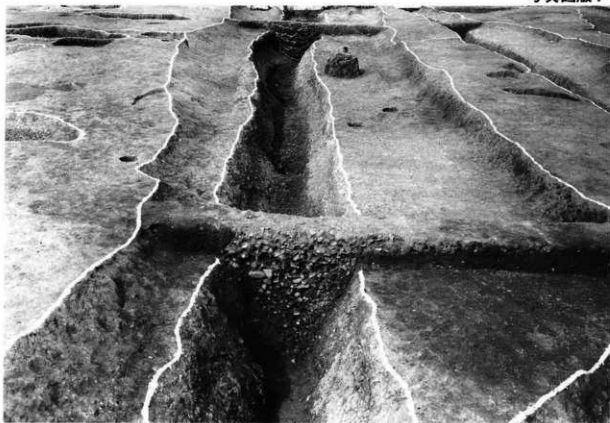


4. A-2区SD-6土層 (南から)



5. A-2区SD-5・6土層 (北から)





1. A-2区SD-1~4 (南から)



2. A-2区SD-5・6 (南西から)



1. A-2区SD-5 (南西から)



2. A-2区SD-5土構遺構 (南西から)



1. 土横状遺構断面 (東から)



2. A-2区SD-5出土状況-1 (南から)



3. A-2区SD-5出土状況-2 (西から)



4. A-2区SD-5出土状況-3 (東から)



5. A-2区SD-6漆器椀出土状況 (南西から)



6. B-4区SD-1出土状況 (北から)

写真図版10



32



52



34



56



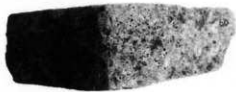
49



58



51



60



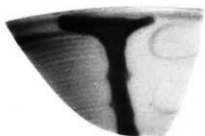
3



8



5



9



6



13



7



SD-4·2

写真図版12





13



19



14



20



15



22



16

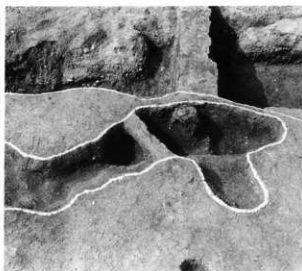


B-4区SD-1·1

写真図版14



1. A-3区SK-1~4 (南から)



2. A-4区SK-1 (東から)



3. B-2区SK-12・15 (西から)



4. B-2区SK-17 (東から)



5. B-3区SK-10 (南西から)



6. 作業風景





9



27



10



29



16



30



26



38

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第62集

## 橋良遺跡（Ⅲ）

2002年3月29日

発行 **エフエフエフエフエフエフ株式会社**

豊橋市教育委員会◎

美術博物館

〒440-0801

豊橋市今橋町3-1

印刷 **㈱豊橋印刷社**